



# アイヌの伝統と近代開拓による<sup>さ</sup>る<sup>が</sup>わ 沙流川流域の文化的景観

No.01-01

所在地：北海道平取町  
面積：40,917.5ha

選定年月日：平成19年7月26日、平成28年3月1日追加、平成30年10月15日追加、令和8年2月17日追加  
選定基準：二(一)(二)(三)(五)(六)(七)(八))

## (1) 概要

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」は、北海道沙流郡平取町(びらとりちょう)に所在し、現在に至るまでアイヌ文化の諸要素をとどめながら、開拓期以降の農林業に伴う土地利用がその上に展開することによって多文化の重層としての様相を示した極めて貴重な文化的景観です。

昨今の社会経済的变化による大規模な商業的植林、農地開発、二風谷(にぶたに)ダム開発がこの地の環境を大きく変化させ、アイヌ文化の継承や河川生態系の回復などの課題も多く、その脆弱な景観の本質的価値は危機に瀕していると考えられます。

選定対象区域は、文化的景観保存活用計画を通じて保存管理、整備活用、運営体制に関する基本方針が定められた40,917.5haです。



近代の開拓を伝える芽生地区



チプサンケと呼ばれる舟おろしの儀式。文化や信仰とそれが執り行われる環境が継承されている



博物館の敷地内に復元された、アイヌの住居であるチセ



伝統的な衣服の原料となるオヒョウの樹皮の採取



いちのせき ほん であ

# 一関本寺の農村景観

No.03-01

所在地：岩手県一関市  
面積：344.2 ha

選定年月日：平成18年7月28日、平成27年1月26日追加  
選定基準：二(一)(八)

## (1) 概要

岩手県南部の栗駒山(くりこまやま) (標高1,627m) 東麓に水源を発する磐井川(いわいがわ)の流域には、河岸段丘から成るいくつかの小盆地が連続し、豊かな農村地帯が展開しています。そのうちの 하나가一関市の本寺地区で、特に中世平泉の中尊寺経蔵別当領に関係する骨寺村(ほねであらむら) 荘園遺跡の諸要素が良好に遺存するとともに、近世・近代を通じて継続的に営まれてきた稲作、近代に始まった炭焼きなどの農林業を通じて、緩やかに発展を遂げた岩手県南地方の農村の文化的景観を示す区域です。

居住地とその周辺の農耕地及び里山は豊かな生態系を維持し、丘陵裾部の居住地に近接する区域には、比較的小規模で不整形な区画から成る水田が残されているほか、微地形に沿って巡らされた用水系統にも緩やかに変転を遂げた農耕地の姿が窺えます。また、水田地帯の微高地に散村の形式で展開する各農家は、北西より吹き付ける強い季節風から家屋を護るために、イグネと呼ぶ屋敷林が巡らされています。

このように、本寺地区の農村景観は、特有の歴史的起源に基づきつつ、この地に独特の気候・風土を踏まえた農耕と居住の在り方を示す貴重な文化的景観です。



全景



微高地に散居的に点在する農家と、川沿いに広がる水田



自然地形に沿って湾曲した水路



イグネ(屋敷林)に囲まれた農家

# と お の 遠野 荒川高原牧場 ち ぶち やま ぐち 土淵山口集落

No.03-02

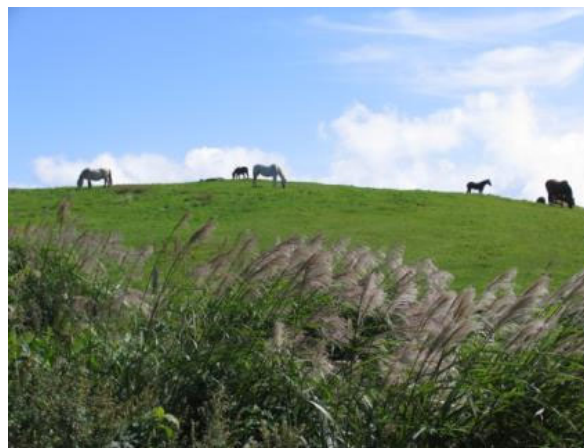
所在地：岩手県遠野市 選定年月日：平成20年3月28日、平成21年2月12日追加、平成25年3月27日追加・名称変更  
面積：1,688.0ha 選定基準：二(一)(二)(八)

## (1) 概要

柳田國男(1875-1962)の『遠野物語』には、遠野に生きる人々の生活・生業の実態を示し、特に自然・信仰・風習に関連する独特の文化的景観が描かれています。

遠野市の北東部に位置する荒川高原牧場は、『遠野物語』の原点を成す「馬」・「馬産」に関する代表的な景観地で、早池峰山(はやちねさん)周辺の準平原に広がる牧草地において、夏は馬を高原に放ち、冬は里で育てる「夏山冬里(なつやまふゆさと)方式」という独特の利用がなされています。また、荒川高原の麓に位置する荒川駒形神社は、馬・馬産への信仰を表すものとして、牧場と密接に関係しつつ発展しました。

遠野市東部に位置する土淵山口集落は、遠野の中心部と三陸沿岸部との中間地点に位置し、これらを結ぶ街道が交わる場所に発達しました。多くの人々が往来することにより、『遠野物語』の題材となる説話が生まれたと考えられています。柳田國男に説話を語り伝えた佐々木喜善(きぜん)の生家や、かつて老人が共同で余生を送ったと伝わる「デンデラ野<sup>(6)</sup>」及び囚人の処刑地伝説が伝わる「ダンノハナ」など、説話の舞台となった場所が良好な環境のもとに継承されています。



荒川高原牧場における馬の放牧



馬・馬産の信仰の対象である荒川駒形神社



敷地内で馬を飼い、馬を農耕や荷役に用いた暮らしの場であった土淵山口集落



ダンノハナの麓における百万遍の数珠回し

所在地：山形県大江町

選定年月日：平成25年3月27日

面積：255.9 ha

選定基準：二(一)(五)(七)(八)

## (1) 概要

左沢は、米沢・長井盆地と山形盆地とをつなぐ最上川の峡谷部に位置します。左沢の町場景観のうち、楯山を中心とする山稜区域には中世に大規模な山城が築かれ、左沢は政治・行政上の拠点として機能しました。市街地北部に当たる楯山では近年まで薪炭材等を供給する里山として機能し、現在もコナラ・クヌギ等の二次林が自生しています。

また、最上川を中心とする河川区域では、歴史的に河川舟運や漁業などの生活・生業が営まれました。幕末に大規模な築(やな)が設置された記録が残るほか、近代には茶屋が置かれ船頭衆で賑わいました。

さらに、町場が展開する市街地は、17世紀前半に左沢藩主となった酒井直次により小漆川(こうるしがわ)城の設置や城下町の造営が行われ政治都市として機能しました。他方で、近世に米沢藩の蔵屋敷が設置されるなど河岸が発達したことにより、山間部で産出された青苧(あおそ)などの取引を中心とする最上川舟運によって町場が展開していきました。近代には鉄道敷設に伴い駅前に新たな市街地が発達したほか、昭和11年の大火を受けて、近世以来の地割りを継承しつつ道路拡張が行われるなど、時代に応じて展開した町場の計画的な街区構造が重層的に表れています。

このように、最上川の流通・往来及び左沢町場の景観は、最上川河畔における政治都市と河岸集落という複合的な都市機能を示しつつ、中世から現代にかけての各時代の都市構造が重層した文化的景観です。



楯山城から望む左沢の町場



最上橋と最上川船着場の近傍



初市をむかえた中央通り商店街



近世にさかのぼる原町通



所在地：山形県長井市

選定年月日：平成30年2月13日

面積：166.8ha

選定基準：二(一)(五)(七))

## (1) 概要

山形県南西部の最上川上流左岸の朝日連峰支脈である西山と最上川上流右岸の東山に囲まれた長井盆地の中心に位置する長井の町場は、中世以前からの門前町及び宿場町等の性格が複合した2つの在郷町(ざいごうまち)である宮村(みやむら)と小出村(こいでむら)を起源とします。

新潟へ向かう越後街道、庄内・出羽三山方面へ向かう道智道等が交差する交通の要衝であり、それぞれの村では宮村館(みやむらだて)や白山館(はくさんだて)が政治的拠点となり、商いの中心となる宮の十日町、小出のあら町が米沢藩の物資の集散地として長井の町場の発展を牽引しました。特に、最上川舟運期には、宮村に米沢藩の陣屋と船着場、小出村には商人衆による船着場が設置され、公的な青苧蔵(あおそぐら)や上米蔵(じょうまいぐら)が置かれて、置賜(おきたま)地方西部の物資の集散地・商業地として流通・往来の中心となりました。

江戸時代後期に描かれた『小出村絵図』には、館の周辺に役人が居住し、町人が現在のあら町や本町などの通り沿いに居住する様子が描かれており、在郷町でありながら商人の町としても発展したことが伺えます。現在も本町、大町、高野町、十日町、あら町などでは、商人が居住した通り沿いに間口が狭く奥行きが深い短冊状の地割りが並び、店・住宅・蔵と続く土地利用を確認することができます。

最上川西岸の街道に沿って商家群等が点在する景観は、江戸時代の最上川舟運に由来する町場景観として重要です。



長井橋上空から町場を望む



宮村に由来する十日町の町並み



町場に張り巡らせた水路の一つである平野川。生活用水や水運に用いられたほか、遊水地の役割を担う



小出村に由来するあら町の町並み



# おおや きがんぐん さいせき 大谷の奇岩群と採石産業の文化的景観

No.09-01

所在地：栃木県宇都宮市 選定年月日：令和6年10月11日 面積：376.5 ha 選定基準：二(一(六)(八))

## (1) 概要

宇都宮市大谷地域は、関東平野北端部に位置し、大谷石（おおやいし）と呼ばれる、柔らかく加工しやすい凝灰岩の産地です。地域中央部には、凝灰岩から成る丘陵が広がり、ここを姿川が南流して穿ち、両岸に奇岩群を生み出しています。近世には、小規模な氾濫原での耕作を主とした農村でしたが、生産性が低く、農家の副業として採石が始まりました。

近代には山主を兼ねた「問屋」が石工と技術を取り入れて、石工町を発展させながら、東京方面に販路を拡げました。戦後は、機械化により昭和40年代に最盛期を迎えた後、出荷量が急減しましたが、現在も採石が続けられています。また、近代以降は奇岩群等が人を呼び、行楽地としての賑わいを保っています。

侵食や採石等により形成された奇岩群、稼働中の採石場と観光活用が進むその跡地、近代に運搬・行楽に用いられた軌道跡を引き継ぐ道、農家の形式を残しつつ装飾が彫り込まれた石蔵を表に構える採石業者の屋敷地、磨崖仏や山ノ神を祀る寺社等、大谷石による自然・人工の要素が特徴を伝えています。

当該文化的景観は、北関東内陸部の農村が、近世に農家の副業として始められた採石を近代以降に地場産業とし、奇岩群等を信仰・観光の対象としながら、発展してきたことを伝え、貴重です。



大谷石を産出する凝灰岩の丘陵が広がる大谷地域



姿川が丘陵を侵食し形成した奇岩群



石山を背景に石蔵を構えるかつての採石業者の屋敷



採石の安全を祈願する例祭が継承されている山ノ神を祀る神社



# とねがわ わたらせがわ みずば 利根川・渡良瀬川合流域の水場景観

No.10-01

所在地：群馬県板倉町 選定年月日：平成23年9月21日 面積：606.5ha 選定基準：二(一)(一)(八))

## (1) 概要

群馬県の最東端に位置する板倉町では、利根川と渡良瀬川との合流点に形成された低湿地（水場）が展開しています。当地は古くから水害常襲地帯であり、豊かな土壌・生態系が育まれる一方、生活を営むために様々な工夫が行われてきました。

当地における人々の居住は縄文時代から確認されますが、広大に展開する沖積低地における集落形成や開墾は、中世末期から近世にかけて実施された築堤や河川の瀬替えによって実現しました。近代には大規模な治水事業が行われ、現在に通じる水利システムが完成しました。こうした治水事業によって開墾された低地では、主に水田耕作が行われています。

水田の中には、河川や沼に面した湿地に溝状の堀を設け、その掘削土を客土（揚げ土）して造成した、川田(かわだ)と呼ばれる農地も営まれています。また、自然堤防上を中心に形成されている居住地では、屋敷地の一面に土盛りをし、その上に水塚(みっか)と呼ばれる避難用建物が築造されています。屋敷地の北西にはエノキ・ムクノキなど自然堤防の環境に適応した郷土種や、水防にも有効なタケ類が植栽されており、防風屋敷林として機能しています。

このように、利根川・渡良瀬川合流域の水場景観は、大河川の合流域に形成された低地で営まれてきた水と共生する生活・生業上の様々な工夫によって育まれた価値の高い文化的景観です。



利根川の北側に広がる低湿地の中の、自然堤防上に集落が立地



屋敷林に囲まれた居住地



高台に築かれた水塚

## (1) 概要

柴又は、東京低地の東端、江戸川の右岸に位置します。古くから微高地上で暮らしが営まれ、古代には、農村としての性格を強めたとされ、また近世初頭まで下総国に属したため、下総国府などに向かう渡河地点として街道が発達しました。

近世になると柴又は、米作りや江戸に向けた野菜の生産が行われました。近世末には水田を広げるため、微高地裾部で柴又用水が開削され、大正期から昭和初期には耕地整理が行われました。震災・戦災を経た東京の市街地拡大に伴い、高度経済成長期以降は農地の宅地化が進み、大正期には金町浄水場が開設されました。

帝釈天題経寺は、近世初期に微高地中央部に開かれました。18世紀後半の板本尊の発見などを機に、江戸からの参詣客が急増しました。近代以降は鉄道網の整備により、柴又は東京近郊の風光明媚な行楽地となりました。参道には、農家が参詣客を相手に副業的に出した店が常設化し、昭和初期までには現在に通じる賑わいが形成されました。参道に面して対面販売・家族経営を基本とする店を構え、奥に工場と住まいを備えた敷地が連なります。このような暮らしや社寺を核とした信仰などにより、地域での紐帯が維持されています。

このような歴史に根差した特徴を残す葛飾柴又の文化的景観は、東京低地東端において渡河地点であった古くからの農村が、江戸東京近郊として発展する中で、その文化と地域の紐帯を活かしながら、近世以降に信仰と行楽の地として発展し続けてきたことを伝え、貴重です。



帝釈天と親しまれる経柴山題経寺。  
時代を通じて境内の整備が行われ、  
彫刻や庭園が境内を飾る



帝釈天題経寺の参道。  
近代に江戸川対岸から移築されたとされる店舗も残る



矢切の渡し。硬い岩盤から成る浅瀬であることから  
古くから重要な渡河地点であった



柴又に古くから屋敷を構える旧家。  
微高地上に多くが分布し、農業を営む家も見られる

# 佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観

No.15-01

所在地：新潟県佐渡市  
面積：951.8 ha

選定年月日：平成23年9月21日、令和5年9月28日追加  
選定基準：二(一)(一)(五)(六)(八)

## (1) 概要

佐渡島の南西部、小佐渡(こさど)山地北西端部には、日本海に注ぐ西三川川の流域に砂金鉱床が展開します。古くは、下流域で砂金採取が行われたとされ、中世末期には「西三川砂金山」が所在する中流域に採掘場が移り、山間に鉱山集落が形成されました。近世に入ると、上流域から導水路により水を引き、中流域で堤に溜めた水を使って砂金山の土砂を洗い流して砂金を得る「大流し」により産金量が飛躍的に増え、徳川幕府の財政を支えました。しかしながら、近世中期以降は産金量が減少し、明治5年(1872)に閉山となりました。産金量の減少に伴い農地開拓の努力が重ねられ、砂金採掘跡や堤跡が田畑へ、大流しの導水路は農業用水路へと転用されて、明治末期には農山村へ姿を変え、現在に至ります。

砂金山に囲まれた、鉱山集落を起源とする笹川集落内には、鉱山の繁栄と安全を祈願する神社や、大流しの過程で廃棄された大石を用いた石積みが残ります。

このように、佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観は、砂金採取によって発生・発展し、産金量の減少に伴い、その跡地と技術を活用しながら農林業へと生業を変化させた集落のあり様を伝える文化的景観です。



砂金山に囲まれた中流域の笹川集落全景



砂金採掘が行われた西三川砂金山「虎丸山」



ガラ石と呼ばれる廃石による石積み



大流しに用いられた上流域の導水路跡

# さ ど あい かわ 佐渡相川の鉱山及び鉱山町の文化的景観

No.15-02

所在地：新潟県佐渡市 選定年月日：平成27年10月7日 面積：630.1ha 選定基準：二(一)(六)(七)(八)

## (1) 概要

相川は、標高約300mの山地から海成段丘を経て狭い海岸低地が続く地形上に位置します。16世紀末、相川で鉱脈が発見されると急速に鉱山開発が進みました。慶長8年(1603)に佐渡代官に任じられた大久保長安(ながやす)は、上町(かみまち)台地の尾根線上に幹線道路を敷き、沿道に大工町など職業別の町立てを行いました。17世紀前半には海岸沿いの下町(したまち)で埋め立てを伴う町立てが行われ、上町と下町とをつなぐ段丘崖に石段等が発達しました。

18世紀に金銀の産出量が激減すると、上町等に散在していた鉱業関係施設が佐渡奉行所内に集約されました。他方で商人の中には廻船業等で財を成す者も現れ、下町には蔵を伴う大規模な地割りの廻船問屋等が並びました。近代には鉱山が三菱へ払い下げられ、上町には間口が広く通りに面して庭を有する社宅も立地しました。下町には相川町役場等の公的機関が立地し、行政機能を持つようになりました。

現在も上町においては、尾根に沿って開かれた通りに面した短冊状の地割りが継承され、各敷地では通り沿いに平屋を配し、背後に段々と降りる建物の構成をみるすることができます。下町は旧街道沿いに展開する近世以来の地割りを継承しつつ、海岸部を埋め立て佐渡市役所支所等が配置され、行政機能を維持しています。

当該文化的景観は、上町地区の生産・居住機能、下町地区の流通・行政機能が、金銀採掘の盛衰に伴い動的な関係を構築しつつ展開してきた相川の歴史の変遷を示す景観地です。



春日崎から望む相川の上町・下町



鉱石を運搬するための鉱車の軌道跡



テラス状の敷地に建てられた鉱山住宅(上町)



善知鳥神社例祭の神輿や高張提灯の行列(下町)

所在地：石川県金沢市 選定年月日：平成22年2月22日 面積：292.0 ha 選定基準：二(一)(五)(七)(八)

## (1) 概要

現在の金沢市街地は「金沢御堂(みどう)」の門前に形成された寺内町を始まりとし、その後に形成された近世城下町を基盤としています。城下町は、寛文・延宝期(1661~80)にほぼ完成し、その形態は「寛文7年金沢図」、「延宝金沢図」において確認することができます。絵図が示す街路網は細街路に至るまで現状にほぼ一致し、城下町の町割や用水は現在の金沢市街地の街路及び街区の構造を決定しています。

また、藩政期の金沢においては、三代利常、五代綱紀によって漆工、金工、陶芸などの制作が奨励され、御細工所を設けて生産品の芸術的な技術水準が高められました。これらの多くは維新後に旧武家層によって商業化され、現在も金沢の主要な生業となっています。

以上のように、「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」は、わが国における城下町発展の各段階を投影した都市構造を現在まで継承し、街路網や用水路等の諸要素が現在の都市景観に反映されるとともに、城下町が醸成した伝統と文化に基づく伝統工芸等の店舗が独特の界隈を生み出す貴重な文化的景観です。



金沢市街地(西から)



近江町市場の賑わい



浅野川河畔



長町を流れる大野庄用水

## (1) 概要

急峻な山が日本海に直接迫る能登半島北側は、海から強い季節風を受ける地域であり、多くの集落が内陸部に立地しています。

その中で、大沢・上大沢は、隣り合いながらも絶壁に隔てられた小さな入り江に連なる僅かな平地に居住地を置く集落です。後背の狭い谷地の限られた傾斜面に耕作地を有しています。集落は平安時代以降は志津良荘(しつらのしょう)に属していたと考えられています。

海に面する集落の外周部には高さ4~5mの細いニガタケを垂直に立てて作った「間垣」と呼ばれる垣根を設置し、季節風から家屋を守っています。ニガタケは、里山や河川で採取されてきました。

集落から離れた緩傾斜地には棚田が築かれています。重労働を軽減するために、アテと呼ばれる木を組んだイナハザで稲を乾燥させてから運搬する知恵が見られます。また、海辺では海藻採取などが続けられています。

大沢・上大沢の間垣集落景観は、日本海に面した地域の半農半漁の生活様式の中で、里山の資源を、耕作や独特な形式の垣根に最大限に利用してきたことを示し、貴重です。



冬の大沢集落



間垣と防風林



上大沢集落



テンマ船が並ぶ船揚げ場

# か が 加賀海岸地域の海岸砂防林及び集落の文化的景観

No.17-03

所在地：石川県加賀市 選定年月日：令和3年3月26日 面積：1,360.0 ha 選定基準：一(三)

## (1) 概要

加賀市西端部、日本海と大聖寺川(だいしょうじがわ)に挟まれる区域に広がる文化的景観で、陸域と周辺海域から構成されています。

海岸砂丘が発達しやすい自然条件下にあって、造林によって飛砂(ひさ)から集落や耕地の保護を図る近世以降の取り組みを伝えています。自然環境のみならず、乱伐とも関係する景観です。

300年以上に亘る歴史の中では、汀線(ていせん)と大聖寺川の間に、砂浜、前丘(まえきゅう)、海岸砂防林、民有林、集落、水田の帯が並ぶ明確な土地利用区分が定着し、この特徴が、橋立(はしたて)丘陵等から一望できる日本海から海岸砂防林までの一体的な眺めと、大聖寺川沿岸等から見られる水田、集落、森林が重なる風景に表れています。

これらの中には、海岸砂防林の背景となる歴史、造林技術、生活との関連を伝える建造物や自然物等が残ります。

加賀海岸地域を越え、飛砂の影響を受けやすい日本海沿岸の地域における生活を理解する上でも重要です。



日本海、海浜、前丘、海岸林を一望する景観



海岸砂防林に守られる集落と水田



海岸砂防林に残る造林時の作業道  
波状の起伏は砂防垣の痕跡を示す



海岸砂防林と橋立丘陵の間に形成される片野町

所在地：福井県福井市

選定年月日：令和3年3月26日

面積：354.7 ha

選定基準：一(一)

## (1) 概要

福井県嶺北地方の越前海岸では、丹生(にゅう)山地の西側斜面が日本海に向かって急崖を形成しています。暖流により冬は比較的暖かく、強い海風が直接あたって雪が積もりにくく、水はけが良いため、古くから水仙が自生しています。一方、平地が少なく、冬は海が荒れ、住むには厳しい環境です。そのため、集落では、幾つもの生業を合わせながら生活が営まれてきました。

冬の副業として自生する水仙を採取し、売ってましたようですが、近代には正月花として斜面での栽培が始まり、戦後は棚田等に栽培地が広げられ、水仙を主たる産物の一つに発展させました。越前海岸の水仙畑は、このような中で形成された文化的景観です。

この最北部を成す福井市下岬地区では、山麓部に断続的に広がる緩斜面や海成段丘に、棚田の石積みや銀杏、柿等の果樹を残しながら広がる水仙畑を特徴としています。また、このような地形における海沿い、段丘上、山間の集落の歴史と文化を表す景観を継承しています。

越前海岸における人々の暮らしを理解する上で、欠くことのできない景観として重要です。



棚田の石積みや銀杏の木を残す水仙畑



海沿いの居倉集落と段丘上の浜北山集落及び、周囲の段丘や緩斜面に広がる水仙畑



柿園を転用した水仙畑



臨海斜面地の水仙畑における摘花作業

所在地：福井県越前町

選定年月日：令和3年3月26日

面積：603.4 ha

選定基準：一(一)

## (1) 概要

福井県嶺北地方の越前海岸では、丹生(にゅう)山地の西側斜面が日本海に向かって急崖を形成しています。暖流により冬は比較的暖かく、強い海風が直接あたって雪が積もりにくく、水はけが良いため、古くから水仙が自生しています。一方、平地が少なく、冬は海が荒れ、住むには厳しい環境です。そのため、集落では、幾つもの生業を合わせながら生活が営まれてきました。

冬の副業として自生する水仙を採取し、売ってましたようですが、近代には正月花として斜面での栽培が始まり、戦後は棚田等に栽培地が広げられ、水仙を主たる産物の一つに発展させました。越前海岸の水仙畑は、このような中で形成された文化的景観です。

この北部、越前町上岬地区では、越前岬の高い海食崖上の段丘及びこれに続く緩斜面の広大な棚田跡に広がる水仙畑を特徴としています。また、このような地形における山上、谷間、入江の集落の歴史と文化を表す景観を継承しています。

越前海岸における人々の暮らしを理解する上で欠くことのできない景観として重要です。



越前岬中央部、海食崖上の段丘に広がる水仙畑



小丘を風除けとする梨ヶ平集落と周辺の水仙畑



背後に水仙畑が広がる左右集落と  
現在もイタブネを使ったわかめ漁が行われる左右漁港



石積み为基础に住宅や畑地が作られている血ヶ平集落

所在地：福井県南越前町 選定年月日：令和3年3月26日 面積：552.4ha 選定基準：一(一)

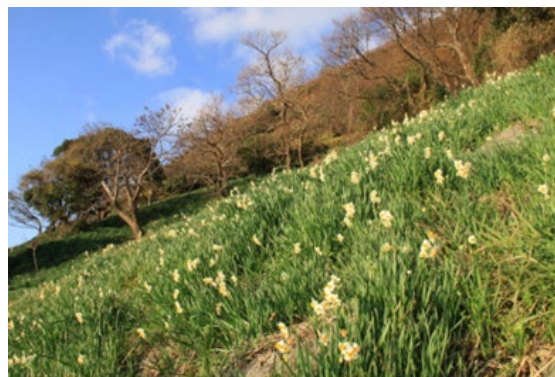
## (1) 概要

福井県嶺北地方の越前海岸では、丹生(にゅう)山地の西側斜面が日本海に向かって急崖を形成しています。暖流により冬は比較的暖かく、強い海風が直接あたって雪が積もりにくく、水はけが良いため、古くから水仙が自生しています。一方、平地が少なく、冬は海が荒れ、住むには厳しい環境です。そのため、集落では、幾つもの生業を合わせながら生活が営まれてきました。

冬の副業として自生する水仙を採取し、売ってましたようですが、近代には正月花として斜面での栽培が始まり、戦後は棚田等に栽培地が広げられ、水仙を主たる産物の一つに発展させてきました。越前海岸の水仙畑は、このような中で形成された文化的景観です。

この最南部、南越前町糠地区では、国道沿いの直線的な断層崖に形成された水仙畑を特徴とします。これは、養蚕や杜氏等の各種副業の盛衰の歴史を表すものであり、水仙畑を引き継いだ杜氏集落と対を成すものです。

越前海岸における人々の暮らしを理解する上で欠くことのできない景観として重要です。



国道沿いの断層崖に広がる水仙畑



断層崖に形成される水仙畑での作業風景



狭小な谷筋に家を並べる糠集落



酒造の神を祀る松尾神社の境内に建つ杜氏功労碑

所在地：長野県千曲市 選定年月日：平成22年2月22日 面積：64.3ha 選定基準：一(一)

## (1) 概要

古くから月見の名所や棄老伝説で有名な姨捨山北麓の標高460～550mの傾斜地には、千曲川から善光寺平に至る広大な盆地に臨んで約1,500枚の水田から成る棚田が展開しています。

近世初頭に畑作と稲作が混在する農耕が定着し始め、利水が進展することにより稲作が主体となり、近世末～近代に日本を代表する棚田の文化的景観を形成しました。

姨捨の棚田の基本構造は、土石流が形成した斜面上に展開する棚田を中心として、水源である更級川(さらしながわ)上流の大池と斜面下方の集落とが有機的に結びついている点にあります。近世初頭における営農は斜面上の小湧水群を利用して出発しましたが、大池から更級川を経て各用水へと給水する灌漑手法が導入され、土坡の畦畔を超えて導水する「田越(たこし)」と呼ぶ灌水方法や、水田の下層に敷設された「ガニセ」と呼ぶ暗渠による排水方法が採用されることにより、棚田は斜面全体へと広がっていきました。

姨捨の棚田は、水源となる大池から更級川へと繋がる水系を軸として、用水や田越の給水手法が網の目のように張り巡らされ、近世から近現代に至るまで継続的に営まれてきた農業の土地利用の在り方を示す独特の文化的景観であり、我が国民の生活又は生業を理解する上で欠くことのできないものです。



尾根筋に展開する棚田



四十八枚田と田毎観音



水源地の一つ、大池



収穫期の棚田

所在地：長野県飯山市 選定年月日：平成27年1月26日 面積：389.7 ha 選定基準：二(一)(三)(五)(八)

## (1) 概要

小菅は、長野県北部の飯山盆地東縁に営まれる集落で、小菅山山麓の緩斜面上に広がっています。集落を囲む山々ではブナ群落・ナラ群落等が卓越し、それらのはかつて薪炭材等に利用されたほか、集落内でもカツラ・ケヤキなどの樹木が植えられていて、小菅神社の例大祭である「小菅の柱松(はしらまつ)行事」に用いられています。

小菅山は7世紀前半に遡る修験の山であり、戦国時代には北信から上越に及ぶ信仰圏を誇ったとされています。小菅神社の直線的な参道の両側に方形の区画を持つ坊院群が密集する古絵図が伝わっており、現在も、当地で産出する安山岩を用いた石積み等で区画された地割が、居住地及び耕作地として継承されています。

小菅では、山体崩壊により生じた湧水等を居住地に引き込み、カワ又はタネと称する池で受け、洗いもの・消雪等に利用しています。また、集落北方の北竜湖から用水を引き、居住地背後の水田・畑地の灌漑に利用しています。水路の維持・管理など集落の共同作業はオテンマと称し、地域共同体の紐帯として機能しています。

小菅の里及び小菅山の文化的景観は、小菅山及びその参道沿いに展開した計画的な地割を持つ集落景観で、カワ又はタネと称する水利が特徴的な文化的景観です。



小菅の里 遠景



集落内の参道「カイド」から妙高山を望む



小菅の柱松行事



オテンマ



なが ら がわ

# 長良川中流域における岐阜の文化的景観

No.21-01

所在地：岐阜県岐阜市

選定年月日：平成26年3月18日

面積：331.9 ha

選定基準：二(一)(三)(四)(七)(八)

## (1) 概要

美濃山地の南端、濃尾(のうび)平野の北端の長良川中流域では古くから鵜飼が行われ、長良川堤外地には鵜飼屋地区の鵜匠宅を含む集落及び水運によって発展した問屋業による川原町地区の伝統的町並みが文化的景観を形成しています。

また、長良川と金華山に挟まれた扇状地では、中世末から斎藤道三や織田信長等によって総構を持つ岐阜城及び城下町が形成され、武家地・寺社地・町人地が形成されました。落城後も長良川を介した物資集散地としての地の利を生かし、材木・和紙・糸等を扱う問屋業、提灯・団扇・傘等の手工業を中心とする商業に依拠した岐阜町が発展しました。城下町に由来する総構の土塁、水路、街路、町割り等の基本的な構造は現在の土地利用にも踏襲されており、城下町由来の構造の中に残る町家等とともに文化的景観を呈しています。

このように、長良川中流域における岐阜の文化的景観は、長良川を中心とした鵜飼漁や問屋業等によって形成された文化的景観及び岐阜城下町の構造を基盤に発展形成された岐阜町の文化的景観が重層したものであり、我が国における生活又は生業の理解のため、欠くことのできないものです。



長良川及び金華山麓に展開する町場



川原町地区の町並み



鵜飼屋地区の鵜匠宅の構え



ぎふ長良川の鵜飼

所在地：滋賀県近江八幡市  
面積：579.8 ha

選定年月日：平成18年1月26日、同年7月28日追加、平成19年7月26日追加、令和3年10月11日追加  
選定基準：二(一)(三)(五)(八)

## (1) 概要

近江八幡の水郷は、琵琶湖の内湖(ないこ)である西の湖(にしのみ)及びその周辺において、伝統的な地場産業とされているヨシ生産に関わる文化的景観です。当地のヨシ生産は、近世に入る頃にはすでに行われていたことが知られています。

琵琶湖の周囲には、内湖と呼ばれる小規模な潟湖(せきこ)が点在していましたが、その多くが第二次世界大戦末期以降の食料増産の中で干拓され、姿を消しました。西の湖は現存する最大の内湖です。

陸ヨシの栽培に適した環境で、毎年の刈り取りや火入れ等により、ヨシの品質が保たれて高い需要をもたらすと共に、ヨシ原が維持されて多様な動植物の生息環境が保全されてきました。

また、ヨシは、屋根葺材や松明の材料等として、暮らしや祭礼の中で用いられてきました。しかし、近年は、生活様式の変化や安価な外国産の輸入等で、ヨシ生産の継承の難しさが増えています。

西の湖全域を、ヨシ原、ヨシ産業と関係の深い集落やその農地及び里山、歴史を表す河川や舟入跡等と共に、一体的に引き継ごうとするものです。



西の湖上空より円山・白王の集落を望む



山裾に沿って立地する円山の集落川



舟入と安土川



伝統的な生業の手法を継続する(ヨシ刈り)

所在地：滋賀県高島市 選定年月日：平成20年3月28日 面積：1,840.7ha 選定基準：二(一)(五)(七))

## (1) 概要

「高島市の海津・西浜・知内の水辺景観」の最大の特徴は、琵琶湖をはじめとする河川・内湖(ないこ)、扇端部の湧水を水源とする小河川、さらに増水時に冠水する水田等によって形成される多様な水界です。これらはそれぞれ、地域固有の豊かな生態系を示し、特に魚類の種類は多様です。

琵琶湖の魚類に併せて発達した伝統漁法に、河川を簀で遮断し、遡上する魚を漁獲部分に誘導するヤナ漁や、カラスの羽を着けたサオで湖岸に寄るアユを驚かせながら網に追いつむオイサデ漁等があります。漁法以外にも、洗濯のための「橋板」や「イケ」と呼ばれる水場や共同井戸など、多様な水文化が残っています。

本地区が歴史的に本格的な発展を遂げるのは、日本海から琵琶湖を経て京都に向かう湖上交通網が整備された15世紀以降のことです。特に江戸時代においては、宿場・港町として多くの人や荷物が行き交い、内湖を活用した荷物の積み出しや受け取りが行われ、旅人を相手とする商売が栄えるなど、港湾都市としての様相を呈していたと考えられます。特に海津は、陸路と航路の結節点に当たり、地域の生産品である淡水魚や石灰を含む多くの物資を、京都・大阪に運びました。

以上から「高島市の海津・西浜・知内の水辺景観」は、古来より北陸道や琵琶湖の湖上交通を背景として、輸送や商業活動それに携わる人々の流通・往来が生み出した極めて重要な文化的景観です。



海津・西浜の琵琶湖に面した石積み



奥田沼



海津の街並み



知内川のヤナ

所在地：滋賀県高島市

選定年月日：平成22年8月5日

面積：295.9ha

選定基準：二(一)(五)(八))

## (1) 概要

高島市新旭町針江・霜降は、安曇川(あどがわ)下流域に広がる扇状地の扇中部に位置する集落で、周囲には豊富な湧水を活用した水田が展開しています。集落内では湧水に端を発する大小の水路が縦横に流れ、針江大川を経て琵琶湖に注ぎます。針江大川流域・水路・水田及び湿地・河口域の内湖及びヨシ帯・琵琶湖が一つの水系として連続し、豊かな生態系が育まれています。

集落の起源は少なくとも中世に遡ります。当時、比叡山延暦寺の荘園として既に広大な田地が開かれており、近世期には湿地を埋めて耕地化したことが記録されています。集落では湧水を活用したカバタと呼ばれる独特の洗い場を多くの家庭が有しており、その水は集落内の水路を経て水田・河川・琵琶湖岸へと繋がることから、水の使用については住民間で暗黙の規則が共有されてきました。

また、湧水は重要な生活上の資源として神聖視されており、湧水点では石造物等が祀られ地域住民によって維持・管理されています。近年はこうした水環境を「生水(しょうず)」と称し、地域の水環境を保全する取組が進められています。

このように、安曇川の湧水を利用した独特の生活が営まれると同時に、集落・河川・水田・ヨシ帯等が一体的な水環境を形成する貴重な文化的景観です。



安曇川扇状地に展開する針江・霜降の集落



針江大川



カバタと集落内の水路



日常の用に供するカバタ

所在地：滋賀県米原市 選定年月日：平成26年3月18日 面積：2,365.5ha 選定基準：二(一)(五)(七)(八)

## (1) 概要

東草野地域は、滋賀県の北東部に位置する伊吹(いぶき)山地の西麓に所在し、姉川(あねがわ)上流の谷部に形成された山村です。峠を介して隣接する岐阜県旧坂内村や滋賀県旧浅井町等との流通・往来が古くから盛んであったことが、地域内の石造物・建築様式・信仰形態などに表れています。

当地は西日本屈指の豪雪地であり、冬季には集落内でも約3mに達する積雪となります。そのため、民家には積雪時に入口機能を確保するための空間であるカイダレや、敷地内にはイケ、集落内の用水にはカワトが設けられ消雪に用いられるなど、豪雪に対応した生活の様子が見られます。

当地の基本的な生業は農業ですが、甲津原(こうづはら)の麻織、曲谷(まがたに)の石臼、甲賀(こうか)の竹刀など、冬季を中心とした特徴的な副業が集落ごとに発達しました。また、峠道が交差する吉槻(よしつき)は南北および東西の交通路の結節点であり、行政施設・商店等が集積する中心地として機能してきました。

このように、東草野の山村景観は、滋賀県北東部の姉川上流において、峠を介した流通・往来によって発達した景観地で、カイダレなど独特の設備を備えた民家形態や、集落ごとに発達した副業など、豪雪に対応した生活・生業によって形成された文化的景観です。



姉川最上流部に位置する甲津原集落



「雪掘り野菜」の収穫イベント



積雪に備えた広い軒下空間 (カイダレ)



石臼の未完成品を用いた階段

所在地：滋賀県長浜市 選定年月日：平成26年10月6日 面積：1,568.4ha 選定基準：二(一)(一)(三)(七)(八)

## (1) 概要

菅浦は、琵琶湖最北部の急峻な沈降地形に営まれた集落です。鎌倉時代から江戸時代にかけての集落の動向を記した『菅浦文書』によると、永仁3年(1295)、菅浦は集落北西に所在する日指(ひさし)・諸河(もろこ)の棚田を、隣接する集落である大浦と争い、以降150年余りにわたって係争が続いたことが知られています。

また、14世紀半ばには住民の自治的・地縁的結合に基づく共同組織である惣(そう)が、菅浦において既に作り上げられていたことが分かります。中世以来の自治意識及び自治組織は、時代に応じて緩やかに変化しながら、継承されています。

菅浦の居住地は、西村及び東村に大きく二分され、それぞれ西の四足門(しそくもん)及び東の四足門で集落の境界を表しています。また、湖から集落背後の山林にかけて連続する地形の中で明確な集落構造が認められます。特にハマと呼ぶ湖岸の空間は、平地が狭小な菅浦において極めて有用であり、生産の場・作業場・湖上と陸上との結節点といった多様な用途が重層しています。

このように、菅浦の湖岸集落景観は、奥琵琶湖の急峻な地形における生活・生業によって形成された独特の集落構造を示す景観地です。中世の惣に遡る強固な共同体によって維持されてきた文化的景観で、『菅浦文書』等により集落構造及び共同体の在り方を歴史的に示すことができる希有な事例です。



菅浦全景



日指・諸河の棚田



西の四足門



ハマミチの石積み前を通る御輿(春祭り)

所在地：滋賀県高島市 選定年月日：平成27年1月26日 面積：1,384.1ha 選定基準：二(一)(五)(七)(八)

## (1) 概要

大溝は琵琶湖北西岸で営まれる集落で、集落南部には湖岸砂州により琵琶湖と隔てられた内湖(ないこ)の乙女ヶ池(おとめいけ)が広がります。

大溝は、古代北陸道の三尾(みお)駅及び湖上交通の主要湊である勝野津(かつのつ)に比定される交通の要衝として機能してきました。戦国時代から江戸時代にかけて大溝城及び城下町が整えられ、乙女ヶ池と琵琶湖との間の砂州上に打下(うちおろし)集落が置かれました。明治初期の蒸気船就航、昭和初期の鉄道敷設など、交通事情は変化してきましたが、旧街道沿いに列村形態を成す集落構造は現在も継承されています。

大溝の旧城下町区域では、近世に遡る古式上水道が現在も利用されています。水源地と高低差がない勝野井戸組合では埋設した水道管で各戸に配水し、大溝西側の山麓に水源を持つ日吉山水道組合では、分水のためにタチアガリと呼ばれる施設を設けています。他方で、打下集落では琵琶湖側に高波・浸水防止のための石垣を築きました。水草が繁茂する乙女ヶ池には水田地先の個人所有地と水草の刈取りを入札で決めた共有地があり、内湖の共同利用の在り方がわかります。

このように、大溝の水辺景観は、中・近世に遡る大溝城及びその城下町の空間構造を現在も継承する景観地で、琵琶湖及び内湖の水又は山麓の湧水を巧みに用いて生活・生業を営むことによって形成された文化的景観です。



大溝遠景 (右が琵琶湖、中央が乙女ヶ池)



タチアガリ



打下集落の水田



大溝祭 (中町通り)

# いばないこ 伊庭内湖の農村景観

No.25-07

所在地：滋賀県東近江市 選定年月日：平成30年10月15日 面積：260.1 ha 選定基準：二(一)(五)(八)

## (1) 概要

琵琶湖岸に多く見られた瀉湖である内湖では、戦中・戦後に水田化が進められました。伊庭内湖は、かつての最大であった内湖の一部です。伊庭内湖の農村景観は、湖東平野中央部に位置し、伊庭内湖、微高地上に形成された集落、その周辺の水田、織山(きぬがさやま)の一峰である伊庭山(いばやま)から成ります。集落には、織山の湧水を源流とし伊庭内湖に注ぐ伊庭川が流れます。

平安時代後期には荘園とされた当地は、近世には、陣屋が置かれ領地経営の拠点であったとともに、港湾と湖岸沿いの街道を枝郷に有する水陸交通の結節点であったため、農村でありながらも人家や社寺が集積していました。この頃には伊庭川を集落内に引き込んで水路を発達させており、明治初期には農業用の小舟の所有率が1戸1艘に上り、昭和初期には宅地の9割以上が水路に面していたことが分かっています。

水路の水は灌漑のほか、魚の畜養や中水に用いられています。敷地には、舟が主な交通手段だった頃に、農作業の利便性向上のために設けられた、水路に面した畑と作業小屋が残ります。また、僅かな微高地を最大限に利用するため、水路の石垣直上に建てられた「岸建ち(きしだち)」と呼ばれる建物も特徴です。豊作を祈る伊庭祭りは、神輿が伊庭山から集落を経て伊庭内湖まで巡行し、地域の文化と紐帯を継承する機会となっています。

伊庭内湖の農村景観は、琵琶湖の内湖岸において、集落内に水路を発達させ、豊かな水を農業・漁業のほか、暮らしの中で多面的に利用することで発展してきた農村の在り方を伝えます。



伊庭川と水路



伊庭川と岸建ち



伊庭内湖から集落、伊庭山を望む



カワトで野菜を洗う

所在地：京都府宇治市 選定年月日：平成21年2月12日 面積：228.5 ha 選定基準：二(一)(一)(五)(六)(七)(八)

## (1) 概要

宇治の文化的景観は、宇治川に代表される自然景観を骨格としながら、古代からの発展を伝える街区を基盤とした市街地とその周辺に点在する茶園によって構成される茶業に関する独特の文化的景観です。

宇治は、京都の南に位置し、古くから渡河点として、また奈良と京都を結ぶ街道の結節点として重要な機能を果たしてきました。宇治川に最初の本格的な架橋が行われたのは大化2年(646)であり、これに伴って橋の両側に集落が形成されたと考えられます。

宇治川左岸に発達した市街地は、平等院とその旧園路を踏まえた格子状の街路と、これに斜交して宇治橋へ向かう街路(宇治橋通り)を基盤としています。格子状街路は発掘調査等により平安時代に藤原氏が別業を配置するために行った古代末期の計画的な地割が、宇治橋通は南北朝期の大規模火災を経て敷設された道が、継承されていると考えられています。

また、宇治は、鎌倉時代に始められた茶生産を通して、安土・桃山時代から近世を通じた茶文化の発展において特に中心的な役割を果たしました。近世には幕府御用の碾茶を独占的に販売した茶師屋敷や茶園等、明治期には茶師の系譜を引く茶商の屋敷や卸や小売の店舗、これらに付属する手工業的な製茶工場等が建ち並びました。今もこのような要素も活用されながら、茶業が継承されています。



宇治川と宇治橋、宇治市街地



平等院表参道の茶店舗街



白川地区の茶園



本篁茶園の茶の収穫

所在地：京都府宮津市  
面積：1,255.1 ha

選定年月日：平成26年3月18日、平成27年1月26日追加・市境変更に伴う一部解除  
選定基準：二(一)(四)(七)(八)

## (1) 概要

宮津天橋立の文化的景観は、宮津湾と阿蘇海(あそかい)を隔てる天橋立とその南北に展開する文化的景観です。

このうち、宮津湾西岸から阿蘇海北岸に位置する府中(ふちゅう)地区には、丹後国分寺跡や条里制に遡る農地などが所在しており、古代丹後国府(たんどこくふ)の所在地に比定されています。中世から近世にかけて、当地が成相寺(なりあいじ)・籠(この)の神社等による信仰の中心として機能したことは、16世紀初頭に雪舟が描いた『天橋立図』等によって示されています。近代になるとケーブルカー等が整備され、土産物・旅館街等の町並みが形成されるなど、観光拠点として発達しました。他方で、国分(くにぶん)・小松・中野等の農業集落は旧道沿いに単列の街村形態を成しており、集落内の石積み水路には洗い物をするためのアライバが設えられています。

また、阿蘇海ではキンタルイワシと呼ばれたマイワシ漁が盛んであり、溝尻(みぞじり)には海に面して舟屋が連続する特徴をもつ漁村が展開しています。

文珠(もんじゅ)地区は智恩寺を核とした天橋立信仰の中心地で、近世の四軒茶屋に遡る観光の中心地として機能してきました。智恩寺参詣の中心地及び天橋立参詣の拠点として展開してきた地域であり、信仰及び観光によって発展を遂げてきた土地利用の歴史的な重層性を示す地区として、独特の文化的景観が展開しています。



宮津天橋立の文化的景観 遠景



国分集落のアライバ



智恩寺門前のにぎわい



溝尻集落の舟屋群

所在地：京都府京都市

選定年月日：平成27年10月7日

面積：1,12.5 ha

選定基準：二(一)(五)(七)(八)

## (1) 概要

京都東山の麓、白川の扇状地に位置する岡崎は、平安時代には院政が執り行われた白河殿(しらかわどの)のほか、六勝寺(りくしょうじ)の大伽藍及び園池が造営された地域です。

応仁の乱の後、農業を主体とする地域となり、岡崎村、聖護院(しょうごいん)村として都市近郊農業が成立しました。近世には白川の支流が灌漑用水として流れていたことが分かります。近代には、殖産興業策の一つとして琵琶湖疏水が建設され、水運、水力発電等によって京都の近代化の礎を築くとともに、平安遷都1100年記念祭及び第4回内国勧業博覧会が開催されました。また、南禅寺界隈では別荘の開発が進み、疏水の水を活用した庭園群が形成されてきました。博覧会跡地には岡崎公園、京都市美術館等の文化施設が建設され、京都を代表する文教地区として現在に至ります。

京都岡崎の文化的景観は、白川の扇状地の利点を最大限に活用し、古代から中世には寺院群、中世から近世には都市近郊農業、近代には琵琶湖疏水の開削に伴い文教施設や庭園等が展開するなど、大規模土地利用を経た京都市街地周縁部における重層的な土地利用変遷を現在に伝えるものです。



岡崎公園界隈



琵琶湖疏水



別邸群のアカマツ



祝祭空間としての神宮道と平安神宮大鳥居



ひねのしょうおおぎ

# 日根荘大木の農村景観

No.27-01

所在地：大阪府泉佐野市

選定年月日：平成25年10月17日

面積：953.9 ha

選定基準：二(一)(一)(八)

## (1) 概要

大阪南部の泉州地方の平野部から、和泉山脈の燈明ヶ岳(とうみょうがたけ) (標高558m) を中心とする犬鳴(いぬなき)山麓にかけての地域には、五摂家のひとつである九条家の中世荘園日根荘の農村地帯が広がります。

その中でも、大木は犬鳴山に水源を持つ樫井川(かしいがわ)沿いの小さな盆地に位置し、紀州の粉河(こかわ)へと通ずる街道沿いに拓かれた水田及び村落が、荘園の名残を示す用水・地名などとともに、泉州地方の山間地における農耕・居住の良好な文化的景観を形成しています。

日根荘は、天福2年(1234)に立券され、天文年間(1532~1555)まで維持された荘園です。16世紀初頭に日根荘へと下向した九条政基の『政基公旅引付(まさもとこうたびひきつけ)』により、当時の荘園内における農産物の品目が知られます。また、19世紀後半の『大木村絵図』等によると、現在の土地利用形態は近世期からほとんど変化していないことがうかがえます。

日根荘大木の農村景観は、中世における摂関家の荘園に起源を持ち、和泉山脈における盆地の地形とも調和し、当時の土地利用の在り方を継承しつつ、近世から現代にかけて緩やかに進化を遂げた農村の文化的景観であり、我が国民の基盤的な生活又は生業を理解する上で欠くことのできないものです。



大木地区全景



道沿いの石積み



小学校の農作業体験



火走神社秋祭り(担いだんじり)

# いくの 生野鉱山及び鉱山町の文化的景観

No.28-01

所在地：兵庫県朝来市 選定年月日：平成26年3月18日 面積：963.4 ha 選定基準：二(一)(六)(七)(八))

## (1) 概要

但馬(たじま)と播磨(はりま)との境に位置する生野では、古くから鉱山開発が進められました。開坑は大同2年(807)と伝わりますが、史料での初見は『銀山旧記(ぎんざんきゅうき)』であり、天文11年(1542)に但馬守護職の山名祐豊(やまなすけとよ)が石見銀山から採掘・製錬技法を導入したとされています。江戸時代には口銀谷(くちなや)・奥銀谷(おくがなや)等に灰吹小屋が立ち並び、生野の町は隆盛しました。明治になると近代技術が導入され、昭和48年(1973)の閉山まで、我が国有数の鉱山として機能しました。閉山後もスズの製錬及びレアメタルの回収が現在まで行われており、特にスズの製錬量は我が国有数の規模を誇ります。

生野市街地には、鉱業都市を示す要素が数多く分布しています。かつて物資の輸送路として活躍した馬車道やトロッコ道は、現在も主要道路として交通の軸線を形成しています。また、製錬滓をブロック状に固めたカラミ石は、民家の土台や塀、水路など至る所で用いられています。かつて鉱山に関わる信仰として行われた山神祭は、現在はへいくろう祭等にその精神が引き継がれており、鉱山町における生活と密接に関わる習俗・伝統が、現在も継承されています。

このように、生野鉱山及び鉱山町の文化的景観は、鉱山開発及びそれに伴う都市発展によって形成された文化的景観であり、現役の鉱業都市として生産活動及び祭等の習俗を継続しつつ、トロッコ道跡やカラミ石の石積みなど鉱業都市に独特の土地利用の在り方を示しています。



口銀谷全景



地区を貫く市川及び右岸のトロッコ軌道跡



カラミ石の石積み



口銀谷の町並みと銀谷まつり

所在地：奈良県明日香村 選定年月日：平成23年9月21日 面積：565.8ha 選定基準：二(一)(一)(五)(八)

## (1) 概要

明日香村の中央部を貫流し大和川へ注ぐ飛鳥川の源流域では、杉・檜が卓越する深い植林地の中に集落・農地が営まれています。奥飛鳥地域の記録は皇極天皇元年（642）に遡ることができ、中世末期には入谷（にゅうだに）・栢森（かやのもり）・稲渚（いなぶち）・畑（はた）の四大字が飛鳥川上流域のムラとして成立したとされています。地域では萩や山吹などいわゆる万葉植物の植生も卓越しており、豊かな生態系が育まれています。

飛鳥川沿いに展開する河岸段丘面上や山裾、山の緩斜面上には、小規模な集落が展開しています。いずれも斜面地に平場を造成するために、飛鳥川の川石や山を切り開いた際に出土した石材を用いた石積みを伴います。集落の中には、急傾斜の茅葺き屋根と緩傾斜の瓦葺き屋根を有した落棟とを組み合わせた大和棟（やまとむね）の民家が点在しており、石積みと併せて独特の集落景観を形成しています。

地域では主に農業が営まれており、特に稲渚では地域でも有数の広さを誇る棚田が形成されています。棚田には15世紀に遡るとされる井手によって水が供給されており、最長3.8kmを誇る大井手をはじめ数10本の井手が耕作者によって管理されています。地域では集落から飛鳥川に降りる階段を設えたアライバが現在も機能しており、また盆迎え・盆送りが飛鳥川を通じて行われるなど、飛鳥川と強く結びついた生活が営まれています。

このように、奥飛鳥の文化的景観は、飛鳥川上流域において展開される、地形に即して営まれてきた居住の在り方と、農業を中心とした生業の在り方を示す価値の高い文化的景観です。



河岸段丘上に立地する稲渚集落



石積みが顕著な栢森集落



稲渚の棚田



大和棟の家屋が卓越する入谷集落

所在地：和歌山県有田川町 選定年月日：平成25年10月17日 面積：110.7ha 選定基準：二(一)(一)(八)

## (1) 概要

有田川(ありだがわ)の上流域では、穿入蛇行により形成された河岸段丘が形成されており、広く水田耕作が行われています。中でも、河川蛇行部へ弧状に張り出した段丘地形において棚田が展開する蘭島は、審美的な観点からも価値が高いものです。

当地の開発は中世の阿弓河荘(あてがわのしょう)に遡りますが、現在に繋がる土地利用の基礎が築かれたのは、大庄屋笠松左太夫(さたゆう)が集落・農地開発を行った近世です。明暦元年(1655)には、有田川支流の湯川川(ゆかわがわ)に井関を設け、湯(ゆ)と称する灌漑水路網を整備することにより、水田化が進展しました。それぞれの湯では田人(たど)と呼ばれる水利組合が組織されており、現在も部頭(ぶとう)(水利組合長)の下に水守(みずもり)が定められ、水路の補修・清掃・管理等が共同で行われています。また、耕地に限られる当地では、畦畔や集落の後背斜面等も山畑に利用されました。かつて和傘に用いられた保田紙(やすだがみ)の原料であるヒメコウゾのほか、シュロ・チャノキ・サンショウなど、特徴的な植生を確認することができます。

このように、蘭島及び三田・清水の農山村景観は、有田川上流域に形成された独特の河岸段丘地形において営まれてきた農業及び山の利用による文化的景観です。



蛇行する有田川に縁どられた蘭島



山端を流れる上湯 (うわゆ)



蘭島での田植え体験



山際に家屋を並べる集落



# ちづ 智頭の林業景観

No.31-01

所在地：鳥取県智頭町 選定年月日：平成30年2月13日 面積：1,810.6 ha 選定基準：一(三)

## (1) 概要

智頭における植林は、江戸時代に入り鳥取藩によって多くの山は管理され、山林の減少が原因とされる大洪水や飢饉などの被害が相次ぎ、災害対策と産業振興として杉の植林が盛んに進められました。

智頭の林業にとって最も重要であったのが、積雪地帯であるこの地に生息していた天然杉を利用して明治期において育苗技術が確立されたことでした。この技術確立により、明治期に植林された100年生を超える杉の人工林が豊富に残っており、その後の大正時代から戦後の造林期に植えられた植林も多く、高齢、若齢人工林と高い山々には天然杉と広葉樹林が混じりあった森林景観を形成しています。

また、林業を生業として暮らしてきた芦津(あしづ)集落は茅葺民家や土蔵などが多く現存しており、集落を取り囲む森林は林業集落ならではの景観です。また、森林資源で財を得た石谷家(いしたにけ)住宅を中心とした宿場町も当時から現在に至る往来の面影を残す歴史的景観を形成しています。さらに木材の運搬手段とした千代川、森林鉄道、旧街道にも往時の生業の姿が垣間見られます。

このように林業という中心的産業を通じて、森林・山村集落・宿場町・流通往来景観など多様性に富んだ景観が形成され、中山間地における造林の典型的な林業景観です。



天然林と人工林から成る山林



智頭宿とその周辺



石谷家住宅



慶長杉周辺の杉林



おくいずも

# 奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観

No.32-01

所在地：島根県奥出雲町 選定年月日：平成26年3月18日 面積：1,563.3 ha 選定基準：二(一)(一)(三)(五)(六)(八)

## (1) 概要

斐伊川(ひいがわ)の源流部に位置する奥出雲地域は、起伏の緩やかな山地と広い盆地が発達しており、「真砂砂鉄(まささてつ)」と称される良質な磁鉄鉱を多く含有する地帯であることから、近世・近代にかけて我が国の鉄生産の中心地として隆盛を極め、「たたら製鉄」が栄えました。

丘陵を切り崩し水流によって比重選鉱するという「鉄穴流し(かんなながし)」が広範囲に行われ、この鉱山跡地(鉄穴流し跡)では、後にその地形を活かして豊かな棚田が拓かれました。江戸時代、松江藩は、有力鉄師(たたら経営者)のみに鈿株(たたらかぶ) (鈿経営権)を与え、安定経営を図ったため、国内の一大鉄生産地域となります。明治に入り、安価な洋鉄が大量に輸入されるようになったことなどから、たたら製鉄は次第に衰退し、大正末年には一斉廃業となりました。その後、日本刀の材料となる「玉鋼(たまはがね)」が枯渇したことから、昭和52年にたたら製鉄は選定保存技術として復活しています。

このように、奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観は、たたら製鉄・鉄穴流し及びその跡地を利用した棚田によって形成されたものです。鉄穴横手(かんなよこて)(水路)及び鉄穴残丘が点在する棚田が広がりを見せる農山村集落を、かつて鉄山(てつざん)(たたら製鉄用の木炭山林)であった山々が取り囲み、その一部で今なお、たたら製鉄が行われている景観地は、我が国における生活又は生業の理解のため欠くことのできないものです。



鉄穴流し跡に拓かれた棚田と追谷集落



鉄師であった櫻井家の住宅



鉄穴残丘が点在する棚田



鳥上木炭銃工場と日刀保たたら



にしき がわ

# 錦川下流域における錦帯橋と岩国城下町の文化的景観

No.35-01

所在地：山口県岩国市 選定年月日：令和3年10月11日 面積：487.3 ha 選定基準：二(一)(七)(八)

## (1) 概要

山口県東端部の岩国市に所在するこの文化的景観は、岩国城下町を由来とします。この城下町は、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いのすぐあと、軍事的緊張が残る周防(すおう)と安芸(あき)の国境付近に、旧山陽道と瀬戸内海を見渡せる山を城山(しろやま)として開かれます。藩主居館や諸役所、重臣の屋敷等が置かれる城山の麓と、中下級の家臣屋敷や町人地等が置かれる岩国山の麓を、錦川が大きく隔てることを特徴とします。城下町整備における護岸や水路、各時代の建造物等には、河川氾濫や内水氾濫に対する備えと共に、川と密接に関わる時代ごとの暮らしが表れます。

それを代表する一つが錦帯橋です。河床が安定した平瀬(ひらせ)を選び、流されない橋を目指し、延宝元年(1673)に当時の建築土木技術の粋を集めて架橋されたもので、登城路と大手虎口を直線的に繋ぎます。

その独特な姿は周囲の自然と共に景勝を成し、名所となって物見の賑わいをもたらしてきました。また、それが経済活動や文化活動を支え、城下町の趣を伝える町並みに、木造三階建の旅館、時代の特徴を示す店舗、桜並木等の新たな景観を調和的に生み出します。人々の環境保全の努力も伴い、近世の絵画に描かれる風景が良好に引き継がれています。

自然の特性を踏まえた開発が都市の個性を生み、往来の賑わいを生み、産業を育むという連関を示す独特な事例として貴重です。



城山からの望む岩国城下町



橋詰の木造三階建の旅館等の町並み



錦川に架かる錦帯橋と兩岸の城下町



錦帯橋への水流を弱める石出し護岸

所在地：徳島県上勝町  
面積：59.3 ha

選定年月日：平成22年2月22日、平成25年10月17日追加・名称変更  
選定基準：二(一)(八)

## (1) 概要

四国の勝浦川(かつうらがわ)上流部は急峻な地形の合間に棚田と農家が散在する地域で、その中の檜原地区には、深い山林に覆われた里山を背景として、檜原谷川へと連続する標高500～700mの急傾斜面上に3つの棚田と居住地が展開します。

閉じられた山間の地すべり地形を示す窪地状の地形に、一群の棚田と農家がまとまって展開する農耕と居住の在り方は、この地域の典型的・代表的な土地利用形態を示し、良好な文化的景観を形成しています。

檜原の棚田を中心とする土地利用の最大の特徴は、文化10年(1813)11月の紀年銘のある『勝浦郡檜原村分間絵図(かつうらぐんかしはらむらぶんけんえず)』に描かれた水田の位置・形態・家屋・道・堂宇・小祠(しょうし)の位置などとの詳細な照合が可能なおことです。精度高く描かれた詳細な内容と現況との比較により、200年以上もの間、土地利用形態が殆ど変化していないことがわかります。

棚田への水利系統は、檜原谷川から等高線に沿って引かれた14本の用水により精巧に張り巡らされています。檜原の棚田は、全体の面積が大きいのに対し、水田1枚当たりの平均面積が180㎡と小さく、平均勾配は約4分の1と急勾配であり、立地する標高も町内の他事例に比較して最も高いなど、この地域における棚田の中でも特徴が見られます。



田植えを間近に控えた棚田



田植えの様子



曲線で形成される耕地



棚田オーナー制によると都市住民との交流

所在地：愛媛県宇和島市 選定年月日：平成19年7月26日 面積：8.3ha 選定基準：—(—)

## (1) 概要

四国島の西端に当たる宇和島市遊子の水荷浦は、豊後水道(ぶんごすいどう)に向かって延びる三浦半島の北岸から、さらに宇和海(うわかい)及び宇和島湾に向かって分岐する今一つの小さな岬の小集落です。

岬の東南側の急傾斜面には、等高線に沿って小さな石を積み上げて形成された壮大な雛段状の畑地が展開し、特に水荷浦では「段畑」と呼ばれています。

近世・近代を通じてサツマイモの栽培により形成された「段畑」は、宇和海沿岸の風土とも調和して、沿岸におけるイワシ漁や湾内のハマチ養殖業とも深く関連しつつ、農耕を継続的に営むことにより緩やかな発展を遂げた特色のある文化的景観です。

「段畑を守ろう会」や地域の自治会などが中心となって、ジャガイモ栽培を中心に都市農村交流事業が積極的に実施されており、今後の文化的景観の維持・活用についても期待されます。



収穫期を迎えた段畑のジャガイモと海面に浮かぶ養殖筏（撮影：石崎幸治氏）



全景



段畑の石積み

所在地：愛媛県松野町 選定年月日：平成29年2月9日 面積：370.3ha 選定基準：一(一)

## (1) 概要

四国南西部では、四国山地と多くの支脈が東西方向に走るため、西側沿岸部はリアス式海岸である一方、内陸部は無数の山地が広がり平坦地が殆どありません。他方、四万十川はこの地域の中心を源流部として蛇行しながら土佐湾へ向けて東流しています。

奥内の棚田及び農山村景観は、四万十川の支流広見川上流部の奥内川沿いの山間部に位置する江戸時代中期以降に形成された4つの棚田群からなる農山村景観です。古文書等の調査からは、地形条件に沿って、谷部を水田、尾根部を屋敷地、屋敷地周辺を畑として継続して利用されてきたことが確認され、その結果、ヒメアカネ及びアキアカネ等の赤トンボ類を含む貴重な生態系が現在も維持されています。また、山間部ではアラカシ、コジイ、コナラ等の天然生林が広範囲で形成されており、地域本来の希少な山林景観を望むことができます。

平成11年に農林水産省の「日本の棚田百選」に認定されてからは全戸加入の保存会が結成され、体験学習会等の棚田保全活動が積極的に進められています。

奥内の棚田及び農山村景観は、四国南西部の四万十川源流域の山間部を開墾した小規模な棚田群からなる文化的景観であり、四国山間部の厳しい地形条件の中で江戸時代以来現在まで継続されてきた生活又は生業を知る上でも重要です。



稲刈り体験



棚田と井上家住宅の主屋及び土蔵



棚田での生業（榎谷）



棚田の石垣



所在地：愛媛県西予市

選定年月日：平成31年2月26日

面積：804.2 ha

選定基準：二(一)(一)(四))

## (1) 概要

愛媛県南西部に位置する狩浜は、宇和海(うわかい)に面するリアス海岸の入江の集落で、近世の狩浜浦を引き継ぎます。元は鰯漁を営む漁村でしたが、その浮き沈みを農業で補う中、甘藷(かんしょ)や麦から櫛(はぜ)、養蚕へと作物を転換してきました。現在はみかん栽培を主要な産業とし、漁業も入江の利点を生かした真珠養殖等が行われています。

当地では、近世の鰯漁と、近代の養蚕業の隆盛を通じて人口が増え、山腹に畑地を広げ、入江、居住地、段畑、山林が連なる壮大な景観が形成されてきました。急斜面に広がる段畑は、所々に露頭する石灰岩を用いて農民が築いてきたものであり、幾段にも重なる灰白色の石垣がみかんの緑や橙に彩られて際立つ眺めを作り上げています。

このような景観は、春日神社の秋祭りが地域の結びつきを保ち、また、昭和50年頃から進められている有機農業がまちづくりへと繋がる中で維持されてきました。

宇和海狩浜の段畑と農漁村景観は、黒潮の影響を受ける愛媛県南西部のリアス海岸における土地利用を示し、また風土に根ざした斜面地農業の展開を伝え、我が国における生活や生業の理解に欠くことのできないものとして重要です。



上空から見た狩浜地区



入江、居住地、段畑、山林が連なる景観



石垣とみかん



春日神社の秋祭り

所在地：高知県津野町  
面積：6,496.5ha

選定年月日：平成21年2月12日、平成24年1月24日追加  
選定基準：二(一)(三)(五)(八)

## (1) 概要

津野町は四万十川の源流点である不入山(いらざやま)を含む源流域に位置します。流域には豊かな自然が残り、「四万十源流の森」として保全されています。

津野町には、平野部が少なく、河岸から上部の山林まで続く傾斜地に張り付くように居住地や耕作地が展開しています。一部の農地で圃場整備が実施された今も、700m級の山々を背景として、小さい石垣に支えられた小規模な畑や棚田を数多く見ることができます。かつてこうした畑では、キビ、イモ、麦、粟、豆などが作られていましたが、現在は茶畑が中心となっています。

また、沈下橋の原型ともいわれる一本橋や100年以上現役で水を送り続けるサイフォン式水路など、人と川との営みの歴史を見ることができます。

「四万十川流域の文化的景観 源流域の山村」は、四万十川の自然的条件に適応しつつ、川と共に家屋や畑地、里山等が一体となって発展した、四万十川源流域における集落の在り方を示す文化的景観です。



船戸集落



茶畑が展開する桂地区



四万十川の第2支流である北川川に架かる早瀬の一本橋



不入山にある四万十川の源流点

所在地：高知県梶原町 選定年月日：平成21年2月12日 面積：8976.9ha 選定基準：二(一)(一)(三)(五)

## (1) 概要

梶原町(ゆすはらちょう)は、四万十川上流域にあり、四万十川最大の支流である五段域(標高1456m)に源を発する梶原川の源流に当たります。

梶原町は極めて平地が少なく、町内における小規模な棚田の総面積は236haに及びます。中でも神在居(かんざいご)の棚田(2.3ha)は梶原町内に点在する棚田の中でも特に勾配が厳しく、源流域の乏しい水を合理的に利用しつつ耕作を続けてきました。

また、豊かな森林は藩政時代から梶原町の財産であり、人々は集落の共有地として常に共同で管理し、火入れをして採草するとともに樹木を伐採して薪の採取や製炭を行ってきました。特に昭和30年代に高まった国内の木材需要に答えるために行われた拡大造林により、梶原町は大林業地帯となりました。昭和50年代には、多くの山村が構造不況に基づき林業活動を手控え始める中で、梶原町は、町単独事業を通じて林業に常に積極的な姿勢を示し、1990年代以降においても地域内連携の組織化や国際的な森林認証制度による高付加価値化を積極的に図ることにより、一貫して林業による地域づくりを進めています。

このように、「四万十川流域の文化的景観 上流域の山村と棚田」は、四万十川上流域の厳しい自然条件の下で営まれた林業と小規模な棚田の耕作によって形成された文化的景観です。



梶原川に架かる初瀬橋



河岸に咲く岸つつじ



神在居の棚田



棚田の石積み

所在地：高知県中土佐町

選定年月日：平成21年2月12日、平成23年2月7日追加

面積：3843.3 ha

選定基準：二(一)(三)(五)(七)(八))

## (1) 概要

標高300mの高原台地に広がる中土佐町大野見(おのみ)地区は四万十川上流域に位置し、地区を二分して貫く四万十川本流に数々の支流が流れ込んで美しい渓谷を形成しています。その川の流れに沿って水田が発展するとともに、農林業の複合経営に活路を求めてきた場所です。

大野見地区の97%を占める山林は、明治から昭和期に杣(そま)や木挽(こひき)によって切り開かれ、陸路が整備されるまでは川を利用して「管流し」で下流へと運ばれていました。これらは陸揚げされた後、陸路で久礼(くれ)まで運ばれ、久礼港から近畿圏などに輸送されました。

また、大野見地区には四万十川本流に12ヶ所見られる堰のうち、6ヶ所が集中しています。これらは藩政期から繰り返された開墾と新田開発に伴う灌漑工事で構築され、今も地区内に遺存しています。

「四万十川流域の文化的景観 上流域の農山村と流通・往来」は、四万十川上流域の狭い土地に農地を開墾し、新田開発を行うとともに、木材の輸送を通じて形成された文化的景観です。



奈路平野



四万十川本流最上流の高樋沈下橋



長野堰



新改集落の石積み田畑

所在地：高知県四万十町

選定年月日：平成21年2月12日、平成23年9月21日追加

面積：1,3472.3 ha

選定基準：二(一)(三)(五)(七)(八)

## (1) 概要

四万十町は四万十川中流域に位置し、特に橋原(ゆすはら)川下流区域では人々は主に林業に従事するとともに、山地を切り開いて棚田や段々畑を営んできました。

また、舟運に対する安全祈願の信仰を集めた三島地区や、筏師が集積した小野地区は、独特の場所として重要な構成要素となっています。特に小野には四万十川流域の林産物を一手に扱う商人達が生活しており、彼らが扱った商品の中には三桎(みつまた)やワラビ粉とともに、楮(こうぞ)を原料とした仙花紙(せんかし)と呼ばれる和紙が含まれています。

また、四万十町内には大規模な水田地帯が広がり、仁井田(にいた)米に代表される県内有数の穀倉地帯でもあります。開拓により開かれた広大な農地は富の集積を生み出し、四国霊場第37番札所の門前町として発展した窪川の発展を促すことによって、四万十川中流域に商業を基盤とする都市的な営みを作り出します。

このように、「四万十川流域の文化的景観 中流域の農山村と流通・往来」は、四万十川中流域が示す豊かな自然環境と、農林業によって形成される多様な土地利用、流通・往来の営みによって形成される独特の文化的景観です。



壺斗俵の水田地帯



壺斗俵の沈下橋



三島の集落



小野の集落

所在地：高知県四万十市 選定年月日：平成21年2月12日 面積：5,303.6ha 選定基準：二(一)(三)(四)(五)(七)(八)

## (1) 概要

四万十市は四万十川下流域に位置し、黒尊(くろそん)川流域、四万十川下流域、四万十川河口域から形成されます。

黒尊川流域は広大な森林資源を有し、一部の原生林が保護されるとともに、体験型学習の場として活用されています。

また、四万十川下流区域は、豊富な水量と広い川幅や河原を持ち、火振漁などの淡水漁業が行われています。中でも口屋内(くちやない)地区は、物資輸送において上流域と河口域を結ぶ中継地として栄え、現在もその痕跡を留めています。

四万十川河口区域は、四万十川本流のうち、四万十市入田から河口までの約13.5kmの区域とその河畔林及び下田を含む区域です。このうち、河口から約9km上流までが汽水域で、この水域の広さが豊かな生物相を育むとともに、川魚や藻類の生産を含む生業の場としての価値を高めています。また、河口部に位置する下田地区は、中世期から四万十川を介した積み出し港として発展しました。

このように、「四万十川流域の文化的景観 下流域の生業と流通・往来」は、四万十川下流域の多様な自然環境が生み出す豊かな恵みと、舟運などの流通・往来によって形成される文化的景観です。



下流域の四万十川



四万十川の観光船



口屋内の集落



ライトアップされた沈下橋

所在地：高知県中土佐町 選定年月日：平成23年2月7日 面積：244.6ha 選定基準：二(一)(四)(五)

## (1) 概要

久礼港は、中世から近代にかけて、四万十川流域を中心とした領域各地で生産された物資を関西方面へと搬出する主要な港の一つとして発達し、他地域より物資や情報を吸収する要港の一つでもありました。

特に近世初頭には、家臣団居住地や城郭を取り込み、港湾機能に重点を置く町が形成され、現在の景観はこの町の構造に基づいて形成されたものです。

久礼に残る建物には、激しい台風に見舞われる独特の風土と共生してきた記憶を示すものが多く、例えば、水切り瓦や土佐漆喰は住居に対する人々の知恵と工夫を伝えます。

明治期には久礼、上ノ加江(かみのかえ)、矢井賀の三つの漁業組合が設立され、戦後には木材関連事業に変わって鰹漁が久礼の中心的な産業へと発展しました。漁師町には家屋が密集し、玄関脇の流しで魚をさばく人々の暮らしを見ることができます。

このように、「久礼の港と漁師町の景観」は、中近世に繁栄した港を核として形成された市街地が、鰹漁とともに発展した漁師町や漁港と相まって形成される独特の文化的景観です。



久礼市街地の全景



久礼漁港内港



漁師町の路地



本町商店街通り

## (1) 概要

求菩提の農村景観は、周防灘(すおうなだ)に注ぐ河川沿いの狭隘な谷間に共通して営まれた農耕・居住の土地利用の在り方を示し、この地域の里に住む人々と山との関係を典型的に表す文化的景観の事例です。

天台修験の聖地であった求菩提山(標782m)の山中の行場をはじめ、修験者の生活の基盤となった山麓の村落・農地の姿を描いた18世紀後半の『豊前(ほうしゅう)(州)求菩提山絵図』とも照合できる点で貴重です。求菩提山の堂舎群は失われて遺跡となりましたが、岩峰及び岩窟群の位置・形姿は往時と変わらずに残され、山麓の鳥井畑(とりいはた)の村落及び棚田・茶畑などの農地も基本的な骨格・構造がほぼ変わることなく現在に継承されています。

極めて精巧な給排水網の下に野面積みの石積みにより区画された棚田の区域には、「ツチ小屋」と呼ばれる石積み擁壁から成る農作業用の小屋も点在し、修験者が伝えた石積みの技術の名残を示す独特の農地景観が見られます。また、豊前修験道最大の祭礼である松会行事のお田植祭や、村落には季節の節目を成す伝統行事も伝えられています。

このように、求菩提の農村景観は、近世に成立し、近現代にかけて、緩やかに進化を遂げたこの地方の土地利用の基本的な骨格・構造を伝えています。



全景



岩岳川沿いに展開する棚田



ツチ小屋



井堰と水路



# わらびの 蕨野の棚田

No.41-01

所在地：佐賀県唐津市 選定年月日：平成20年7月28日 面積：400.9 ha 選定基準：一(一)

## (1) 概要

「蕨野の棚田」は、唐津市相知町内に所在し、蕨野区と池区の二つから形成されています。棚田は、八幡岳の馬蹄形状をした北向きの急斜面地に約36haにわたってひろがっています。棚田の石積みは野面積みを基本とし、平均の高さは3～5m、高いものでは8.5mに及びます。

池区には棚田の水源となる2つのため池（明治18年、昭和12年）があります。

蕨野の集落は、平山川河谷の標高150m付近に疎開村状に展開しており、「ツカ」と呼ばれる防風石垣を伴う民家を残しています。技術的な特性から、防風石垣の石積みと棚田の石積みは、同じ石工（集団）によって積まれたと考えられます。棚田の築造は、少なくとも江戸後期にまで遡ると考えられますが、現存するものの大半は明治～昭和20年代までに形成されたものです。

棚田とその周辺の森林及び水系は、固有の製造技術や「手間講(てまこう)」と呼ばれる共同作業に基づいて維持され、それぞれの関係を維持しつつ一体として独特の土地利用を持つ文化的景観を造り上げます。現在は、減農薬・減化学肥料によって生産された「棚田米蕨野」が、ブランド化に成功しつつあります。



蕨野の棚田全景（北側から）



早苗の緑がまぶしい棚田（南川原）



高さ8.5mの高石垣（南川原）



手間講隊による田植え

所在地：長崎県平戸市

選定年月日：平成22年2月22日、平成22年8月5日追加

面積：1,455.2ha

選定基準：二(一)(一)(五)(八))

## (1) 概要

平戸島の小河川沿いの谷部には、安満岳(やすまんだけ)を中心として防風石垣や石塀を備える春日(かすが)・獅子(しし)・根獅子(ねしこ)・宝亀(ほうき)、田崎(たざき)・神鳥(かんどり)・迎紐差(むかえひもさし)の集落や棚田・牧野が展開しています。

これらの集落の多くは、16世紀半ばから17世紀初頭にかけて書かれたイエズス会宣教師の書簡において、教会や慈悲組合についての記述とともにその名を確認することができます。また、現在も伝統的家屋の中に戦国～江戸時代初期のキリシタン信仰に起源を持つ納戸神を祀るなど、かくれキリシタンとしての営みを続け、安満岳や中江ノ島のような聖地とともに、殉教地を伴う独特の様相を現在に留めています。

棚田群は、大きなものでは海岸から標高約200mの地点まで連続して築造され、山間部に点在する若干の耕作放棄地を除けば、全体としてよく耕作されています。地元の礫岩を用いた石積みの中には、生月(いきつき)の技術者集団の手によるものも認められます。

以上のように、「平戸島の文化的景観」は、かくれキリシタンの伝統を引き継ぎつつ、島嶼(とうしょ)の制約された条件の下で継続的に行われた開墾及び生産活動によって形成された棚田群や牧野、人々の居住地によって構成される独特の文化的景観です。



平戸島西海岸の集落



海沿いに展開する棚田



谷沿いに耕作された棚田



石積み擁壁が卓越する集落

# お ち か し ょ う 小値賀諸島の文化的景観

No.42-02

所在地：長崎県小値賀町 選定年月日：平成23年2月7日、平成23年9月21日追加  
面積：1,124.3ha 選定基準：二(一)(二)(四)(七)(八)

## (1) 概要

小値賀島は大小17の島嶼(とうしょ)群で形成される小値賀町の主島であり、火山活動によって形成された複雑な地形とともに、各種の亜熱帯性植物や野生生物が根付く独特の風土を持っています。各島は、古くより島嶼間を移動しつつ農業や放牧を営む独特の生活様式を維持してきました。

文字資料における小値賀島笛吹の初見は明徳元年(1390)ですが、この地は遣唐使船の通過地点として古代において既に流通・往来における重要な拠点であったと考えられ、室町時代には日明貿易に基づく中世の港湾都市として栄えます。江戸時代になると、平戸藩の下で異教徒や異国船の監視を目的とし、押役所や遠見番所が設置されました。

笛吹の集落は、農村地帯の笛吹とと漁業者・各種職人・商業者等が混在する笛吹浦の2地区に大きく別れて形成され、江戸期には壱岐より移住した小田家が鯨組を組織し、新田開発等の事業展開を行うことによって経済的に成長します。島嶼間を移動する生活は、参詣や墓参の営みとして現在まで継承されています。

このように「小値賀諸島の文化的景観」は、多様な地形的特徴を示す島嶼間の移動や近隣諸国との流通・往来に基づいて発展した港や居住地等によって形成される独特の文化的景観です。



小値賀島笛吹集落



浦町地区の古民家と石垣



笛吹新町路地の古民家



大島全景



# 佐世保市黒島の文化的景観

No.42-03

所在地：長崎県佐世保市

選定年月日：平成23年9月21日

面積：475.5ha

選定基準：二(一)(一)(八)

## (1) 概要

九十九島のうち最大の島である黒島は、海岸部の標高50m付近までは急な断崖となっている一方、標高約100m以上はなだらかな地形となっており、畑地や集落が点在します。暖流の対馬海流の影響を受けた海洋性気候であるため亜熱帯植物も多く自生しています。

江戸時代の黒島は、平戸藩に属する西氏の所領であり、藩の牧場が置かれていました。18世紀に開拓を目的とする移住が平戸藩の主導で行われ、特に牧場廃止後は跡地開拓のためさらに移住が推進されました。また、黒島北方に浮かぶ伊島(いしま)・幸ノ小島(こうのこじま)は古くから黒島の属島とされ、伊島では牛の放牧、幸ノ小島では藻場として肥料用の海藻採取が行われました。

黒島は夏季・冬季ともに季節風の影響を強く受ける地域で、特に台風来週時には猛烈な南風に襲われます。そのため居住地はできるだけ風の影響が少ない場所が選ばれ、同時に屋敷及び隣接する畑地等の南側を中心に防風林が発達することとなりました。防風林にはスタジイなど自然林を活用したものと、アコウなど意図的に植栽されたものが確認されます。特に島南部の蕨(わらべ)集落では、亜熱帯系の植物であるアコウが防風林として海側に植えられており、島に豊富な閃緑岩の石で築かれた石垣の上にアコウの大樹の根が張る、特徴的な景観が展開しています。

このように、佐世保黒島の文化的景観は、近世期の牧に起源を持つ畑地やアコウ防風林と石積みによる居住地、属島における生産活動など、独特の土地利用によって形成される価値の高い文化的景観です。



黒島全景



海→防風林→居住地→畑地



石積みが卓越する集落



石積みに巻き付くアコウの根

所在地：長崎県五島市  
面積：12,846.0ha

選定年月日：平成23年9月21日、令和4年3月15日追加・名称変更  
選定基準：二(一)(三)(八)

## (1) 概要

五島列島における瀬戸を介した久賀島及び奈留島の集落景観は、五島列島南西部に位置する久賀島及び奈留島の大串(おおくし)集落・江上(えがみ)集落、その周辺海域を範囲とします。

北に湾口を開く馬蹄形をした久賀島においては、島の外周では急傾斜に段々畑を築き、内湾側では河川が発達した緩傾斜に水田を広げます。近世初期には存在した6集落は、冬の北西風を避けられる山を背負う、比較的大きな入り江に立地します。その周縁には、近世後期に潜伏キリシタンを多く含む大村藩からの移住者により開拓が行われたとされる集落が点在します。これらは、五島列島南西部の農業に比重を置く暮らしと歴史を良く伝えるとともに、島内には広い自然林や古樹を含め、ヤブツバキが多く見られ、五島列島の椿林の維持管理や椿実採取の慣習を伝えます。

久賀島の北東に位置する奈留島の大串集落及び江上集落は、久賀島の外海側の集落と共通する特徴を有するとともに、久賀島と瀬戸を渡っての日常的な繋がりがあり、その名残を沿岸の集落に留めています。

当該文化的景観は、瀬戸越しに眺める海と島の景観、気候風土に即した土地利用を見せる集落景観、ヤブツバキ等の利用が特徴をつくる山林景観等に、五島列島南西部における歴史的、文化的な特徴が見出され貴重です。



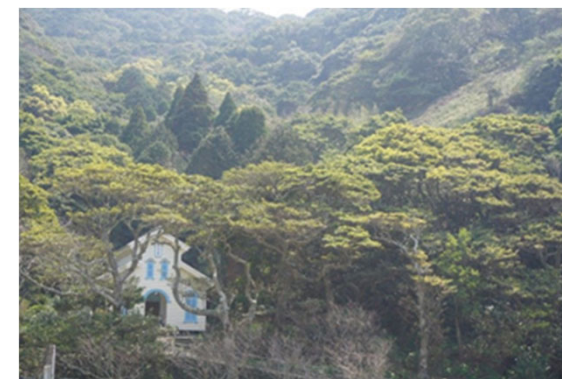
久賀島からの奈留島への眺め



管理されたツバキ林



奈留島江上集落の谷泊地形



久賀島からも礼拝に訪れた奈留島の江上天主堂

所在地：長崎県新上五島町 選定年月日：平成24年1月24日 面積：1,508.0 ha 選定基準：二(一(一)(四)(八))

## (1) 概要

五島列島最北部に位置する中通島(なかどおりじま)では、沿岸部の浸食地形に立地し漁業を主な生業とする集住形態の集落と、地滑り地形による比較的緩やかな斜面地に立地し主に農業を営む散村形態の集落といった対照的な集落形態が形成されています。

当地に人が居住した痕跡は縄文時代に遡り、江戸時代後期までは専ら小規模な漁村が営まれています。越前や紀州から移住してきたとされる漁民は、加徳(かとく)と呼ばれる世襲制の漁業権を有し特権的に漁を行ってきました。一方、農業集落は、江戸時代後期に農地開拓・食糧増産のため主に大村藩より農民が移住したことに起源を持ちます。開拓を行いつつ分家をするため末子が本家を相続する、イエワカレと呼ばれる独特の慣行により、居住地や農地を広げてきました。

現在も主に甘藷(かんしょ)が栽培されており、収穫された甘藷は薄く輪切りにしたカンコロに加工されます。カンコロの乾燥には木や雄竹で作られたヤグラが用いられ、ヤグラに隣接してカンコロを茹でるジロが設置されます。自家消費用の甘藷はそのまま家屋の地下に設えられたイモガマに保存するなど、甘藷の栽培から加工・保存まで一連の生産に関わる施設が各戸単位で形成されています。

このように新上五島町北魚目の文化的景観は、厳しい地形条件に適応し、農村及び漁村という対照的な形態を成す集落による価値の高い文化的景観です。



海岸に漁村、山間部に農村が展開する小瀬良集落



上小瀬良集落の段々畑



ジロとヤグラ



江袋教会



なが さき し そと め

# 長崎市外海の石積集落景観

No.42-06

所在地：長崎県長崎市  
面積：765.7ha

選定年月日：平成24年9月19日、平成30年2月13日追加  
選定基準：二(一)(一)(八)

## (1) 概要

長崎市外海の石積集落景観は、西彼杵(にしそのぎ)半島中部の出津(しつ)川及び矢戸川等の小河川流域で営まれる、近世から続く畑作を中心とした集落景観であり、主として結晶片岩によって形成された石積みの特徴とします。流域の河岸段丘面及び山間部の斜面地では、17世紀初頭の甘藷栽培の拡大に伴って斜面地の開墾が進み、近世後期にかけて山頂まで畑地が切り拓かれました。幕末に作成された絵図には、住居・畑地・墓地が一つの単位として点在する集落の様子が描かれており、こうした集落構造は現在も継承されます。

出津・牧野地区では、斜面地を開墾した際に出土した結晶片岩を用いて、土留めの石垣、防波・防風の石築地、居住地の石塀、住居・蔵の石壁など多種多様の石積み構造物が築かれてきました。結晶片岩の石に赤土及び藁すさを練り込んで築いた伝統的な石壁であるネリベイのほか、明治期にはパリ外国宣教会のマルク・マリー・ド・ロ神父によって、藁すさに代わり赤土に石灰を混ぜる練積みのド・ロ壁が導入され、現在もこうした石積み構造物が数多く築かれています。赤首(あかくび)・大野地区においても同様のネリベイが見られます。

このように、長崎市外海の石積集落景観は、結晶片岩を主とする地質が特徴の地において、数多くの石積み構造物を築きつつ畑作を営んできた、この地域に特有の土地利用形態を示す文化的景観です。



斜面地に形成される集落



ネリベイ建物



結晶片岩を用いた墓石



玄武岩が使用されている大野教会堂のド・ロ壁

所在地：長崎県新上五島町 選定年月日：平成24年9月19日 面積：976.9ha 選定基準：二(一)(六)(八)

## (1) 概要

崎浦は、五島列島北東部に位置する中通島(なかどおりじま)北東部の地域で、赤尾、江ノ浜、友住(ともすみ)、頭ヶ島(かしらがしま)の集落から成ります。崎浦で露頭する五島層群に属する砂岩は層状に削げて加工しやすいため、石材業が営まれてきました。

崎浦は漁業が盛んで、近世には捕鯨が行われました。幕末には捕鯨が衰退する一方で、長崎・平戸での建築用材の需要が高まり、崎浦では採石業と石材加工業が盛んとなりました。当地の砂岩は広く流通し、出荷先では五島石と称されていたとも言われます。石切場は、頭ヶ島とこれに面するロクロ島を中心に、運搬船が寄せられ、平坦な作業場を確保できる海岸部に限られました。赤尾、江ノ浜、友住では、石切場に隣接する集落に多くの石工が居住しました。昭和25~30年頃に最盛期を迎えましたが、現在も採石が行われています。

集落には、腰板石を張り巡らせた家屋や練り積み壁を有する納屋、石敷きの路地や階段が多く残ります。これらに加え、防風石塀や石垣、神社の鳥居や灯籠、墓石、石碑、石祠、石鉢等が集落の至る所に見られ、石切場とその跡とともに、当地が砂岩の産地であり消費地であることを伝えます。また、集落の石工や信徒も建設に携わった切り石積みの頭ヶ島天主堂(大正8年(1919)建築)は、当地の信仰の歴史も伝えます。

新上五島町崎浦の五島石集落景観は、幕末以降に、五島列島のみならず、長崎・平戸等、西北九州一帯に流通した五島石の生産地である集落の特徴を示し、貴重です。



海岸沿いに展開する集落(赤尾集落)。  
宅地、その周辺の水田や畑地、その背後の里山から成る



高さ6尺の腰板石を備えた家屋



幕末に潜伏キリシタンの移住があった頭ヶ島集落に  
禁令解除後に築かれた頭ヶ島天主堂



「割り矢」の跡が残る石切場(採石場)跡

所在地：長崎県波佐見町 選定年月日：令和8年2月17日 面積：333.2 ha 選定基準：二(一)(六)(八)

## (1) 概要

波佐見町は、長崎県中央北東部の県境、山間部に位置し、近世に大村藩(おおむらはん)が重要産業とした窯業と稲作を現在も主産業としています。当該文化的景観は、町東部南端で隣り合う窯業集落である中尾郷(なかおごう)と農業集落である鬼木郷(おにぎごう)から成ります。

国内の磁器生産は近世初頭に肥前で始まり、皿山(さらやま)と呼ばれる窯業専門集落が、磁器の原料となる陶石と薪を生む山林を背景に、陶石(とうせき)を唐臼(からうす)で砕くための川と登り窯に適した急斜面をもつ谷に開かれました。近世初頭に集落が開かれた中尾皿山では18世紀には巨大な登り窯で安価な磁器を大量生産し、国内に普及させました。近代以降は技術の進展などに伴い、窯や職住一体の住まいを変遷させつつ、窯業を発展させてきました。

鬼木郷は、山中の緩傾斜地にあり、近世初期には水田耕作がなされ、近世後半以降に中尾皿山の発展に合わせて棚田を広げたとされています。棚田は3本の河川が合流する谷に広がり、田越し灌漑などの伝統的な水利の仕組みや石積みを集落全体としてよく残しています。中尾皿山は近代には都市的な様相を呈し、鬼木郷から中尾郷へ峠を越えて米や農作物・薪炭・梱包材となる藁製品の販売や下肥(しもごえ)の購入、高度経済成長期には農閑期に窯業の手伝いなども行われました。

当該文化的景観は、肥前において磁器生産及び窯元をはじめとした住まいの変遷と、伝統的な水利の仕組みを持つ棚田と農家の住まいのあり方を、集落全体として伝えることに加え、両集落が窯業と農業を主産業とする地域の発展のあり方を伝え、貴重です。



高密度な窯業集落である中尾郷(手前)と、3本の河川沿いに鬼木棚田を広げる鬼木郷(奥)



約160mに及ぶ近世の中尾上登窯跡や、石炭への燃料の転換を示す煉瓦煙突などが、中尾皿山の歴史を伝える



山中の緩傾斜地に開かれた鬼木棚田の中に、3集落が点在する鬼木郷

所在地：熊本県山都町  
面積：605.6 ha

選定年月日：平成20年7月28日、平成21年7月23日追加、平成22年2月22日追加  
選定基準：二(一)(五)(七)

## (1) 概要

山都町(やまとちょう)は九州の中央部に位置し、世界最大のカルデラである阿蘇南外輪山のほぼ全域を占めます。町域の南側は九州中央山地に接し、有明海につながる緑川が東西に貫流しています。緑川以北の地質は阿蘇火砕流堆積物が主で、外輪山山頂を水源とする小河川の浸食により、火山性丘陵が形成されています。

山都町の中心地である浜町の南方に位置する白糸台地はこの一つであり、四方を河川に囲まれ、特に南側は緑川に面していることから、古くから河川を利用した流通・往來の中心地として栄えるとともに、農業用水に困窮する地形条件から、近世後期において通潤橋を伴う大規模な基盤整備事業を実施することとなりました。

「通潤用水と白糸台地の棚田景観」は、流通機能において、結節点として重要な場所であったことを示す様々な痕跡を残しつつ、通潤用水とこれに伴う棚田が、造成時期の原形を保ちつつ、農耕活動が現在に至るまで継続することにより維持されてきた重要な文化的景観です。



通潤橋



10号水路周辺の棚田



11号水路の棚田



素掘りの12号水路と分水吐

所在地：熊本県天草市  
面積：1,017.6ha

選定年月日：平成23年2月7日、平成24年9月19日追加・名称変更  
選定基準：二(一)(四)(七)(八)

## (1) 概要

天草下島南西部、羊角(ようかく)湾の北岸に位置する崎津では、中世には外国船が出入りする港として、近世から近代にかけては貿易や石炭搬出など流通・往来の拠点として、天然の良港を活かした港湾都市が形成されました。狭隘な湾内のわずかな平坦地に家屋が密集し、浦へ出るためにトウヤと呼ばれる小路が数軒毎に形成されています。海上には、竹やシュロを利用したカケと呼ばれる構造物が設けられ、漁船の碇泊や魚干しなど、生活・生業上の施設として利用されています。

また、崎津の入江の奥に位置する今富では、今富川の支流である2つの小河川が形成する谷地形に集落が形成されており、江戸時代から数次にわたる干拓により拡大された農地において、水田耕作を中心とした生業が営まれています。今富からは農産物・林産物が崎津へ搬出される一方、水産物が崎津から今富へもたらされるなど、両集落の密接な関係は現在も維持されています。

このように、崎津・今富では、歴史的に流通・往来の拠点であるとともにカケ・トウヤなど独特の土地利用の在り方を示す崎津の漁村景観、及び近世以降の干拓により農地を広げつつ山裾に集落を営んできた今富の農村景観による一体の文化的景観が形成されています。



崎津集落



カケと石積み護岸



迫地形に発達した今富集落



干拓により拡大されてきた農地

所在地：熊本県宇城市 選定年月日：平成27年1月26日 面積：107.1ha 選定基準：二(一)(五)(七)(八)

## (1) 概要

三角浦の文化的景観は熊本県中西部に位置し、三角ノ瀬戸に面して展開します。三角ノ瀬戸は水深が深く、湾内は比較的穏やかで暴風・波浪等の影響を受けにくいことから、古代より八代海と島原湾とを結ぶ南北方向及び九州内陸部と天草諸島とを結ぶ東西方向の流通・往來の結節点として機能してきました。

三角ノ瀬戸は変化に富んだ海岸地形をしており、戦国時代に島津氏家老の上井覚兼(うわいかくけん)が和歌を詠むなど古くからの景勝地として知られています。近代になると小泉八雲など文人墨客が文学の舞台としたほか、熊本を本拠とする第六師団の保養地に指定され、現在も別荘が立地するなど、三角浦は保養都市として機能してきました。

また、明治20年(1887)に内務省雇いのオランダ人技師ムルデルの設計により近代港湾が建設され、三角港は屈指の拠点港として隆盛しました。築港と同時に計画的な市街地が整えられ、商業及び司法・行政地区等が設置されました。道路・水路等から成る建設当初の都市構造は現在も継承されています。

このように、三角浦の文化的景観は、保養都市及び特に近代以降に大きく発展した港湾都市という2つの都市機能が複合した文化的景観です。



三角浦遠景



集落内の街区及び水路



港湾区域



ガイドによる地区の案内

所在地：熊本県阿蘇市  
面積：10,821.6 ha選定年月日：平成29年10月13日、令和3年3月26日及び令和5年3月20日追加・名称変更  
選定基準：一(二)

## (1) 概要

阿蘇市では、北外輪山及び中央火口丘の北斜面に大規模な草地が広がり、それぞれ阿蘇谷の平地へ向けて下るにつれて斜面は林地、山裾は居住地、平地は耕作地が広がっています。

平安時代の『延喜式(えんぎしき)』に阿蘇での馬生産を示す「牧」の記述があるように、阿蘇の草地は、千年以上にわたり、牛馬の放牧及び飼料用の草を得る場、耕作地に施す緑肥及びたい肥を供給する場、時には居住地の家屋の屋根及び生活用具の材料を供給する場等として継続的に利用されています。草地環境のみで生き残るヒゴタイ・ヤツシロソウ・ハナシノブ等の大陸系遺存植物が生息するネザサ・ススキ群落、シバ群落の草地が広がっており、全国的にも貴重な生態系が育まれています。

阿蘇神社の西方に位置する霜神社では、少女が火焚殿にこもって焚き木を燃やし続けて霜除けの祈願を行う火焚き神事が継承されており、阿蘇の気候風土と生活又は生業が密接な関係を有してきたことが理解できます。阿蘇神社参道沿いの商店街では、阿蘇谷の豊富な湧水を活用した商店街整備等の自主的な取り組みが継続的に実施されており、景観保全及び地域活性化が図られています。阿蘇北外輪山及び中央火口丘群の草原景観は阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要です。



毎年の春に行われる野焼き



外輪山や中央火口丘群に広がる日本最大の二次草原



草原は家畜の餌の重要な供給源



草原に放牧されるあそ赤牛

所在地：熊本県南小国町 選定年月日：平成29年10月13日 面積：1,282.2ha 選定基準：二(一)(二)(三)

## (1) 概要

南小国町は小国郷の南半分を占め、東部のくじゅう山系涌蓋山麓(わいたさんろく)から連なる標高400m以上の斜面地に位置します。

筑後川源流域にあたるため、北外輪山から流れ出た湯田川、中原川、馬場川、志賀瀬川、満願寺川、田の原(たのはる)川等の中小河川が町域を北流します。谷底の居住地周辺に狭い耕作地が広がり、斜面上は林地、谷が深いため居住地から離れた尾根筋高台に草地が広がる傾向があり、大規模な草地は涌蓋山周辺と阿蘇外輪山から延びる台地上に残ります。

江戸時代には、井手(水路)の開削、灌漑整備によって畑から水田への転換が行われます。また、筑後川下流の日田から木材の買い付けが行われた地域であり、戦後の拡大造林によって、さらに草地や雑木林からスギ林への転換が進み、林地は小国杉を中心とした林業景観が広がります。

中原川沿いには、かつて阿蘇一円から牛馬を伴って畜産農家が参拝に訪れたという馬頭観音を祀る神社が残っており、往時の馬の供養と結び付いた景観を知ることができます。

田の原川沿いの黒川温泉は、開業してから地域が一体となって、街並みの色彩統一、雑木の植栽、乱立看板等の撤去を実施し、自然景観及び和風旅館を尊重した景観保全による地域づくりを進めていることで著名です。

南小国町西部の草原及び森林景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要です。



草原



野焼き

所在地：熊本県小国町 選定年月日：平成29年10月13日 面積：13.2ha 選定基準：一(二)

## (1) 概要

小国町は小国郷の北半分を占め、北外輪山北側斜面の標高300m以上の起伏のある斜面地に位置し、筑後川源流の杖立川が北西の日田方向へ流れます。谷底の居住地周辺に狭い耕作地が広がり、斜面上は林地、谷が深いため居住地から離れた尾根筋高台に草場が広がる傾向があり、大規模な草場は町東部の涌蓋山周辺に残ります。

筑後川下流の日田から木材の買い付けが行われた地域であり、明治6年（1873）にはさらに多くのスギ・ヒノキを運ぶ必要が生じたため、杖立川の浚渫工事が行われた記録が残っています。現在は小国杉の植林を中心とした林業景観が広がります。小国杉の起源は江戸時代に遡ると言われており、挿し木で生育する樹種であり、強度及び艶があるため優秀な木材となります。

涌蓋山麓では、九重山を熱源とする温泉が多数存在し、至る所で温泉の蒸気が噴き出しており、黒菜(くろな)と呼ばれる伝統的な葉物野菜の生産、温泉熱を生かした発電・ハウス栽培・調理等が積極的に行われています。

涌蓋山麓の草原景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要です。



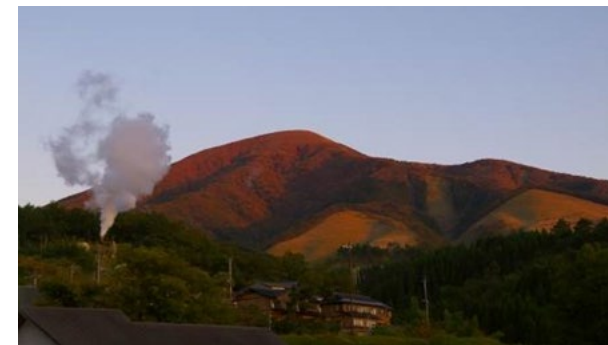
草原



野焼き



放牧の様子



涌蓋山の遠景

# 阿蘇の文化的景観 産山村の農村景観

所在地：熊本県産山村 選定年月日：平成29年10月13日、令和5年3月20日追加  
面積：366.5 ha 選定基準：二(一)(二)(三)

## (1) 概要

産山村は、阿蘇山とその北東に位置する九重山の火山帯が複合する地域に位置します。九重山麓では、かつて九州が中国大陸と陸続きであったことを示すヒゴタイ、野焼きによって守られてきたキスミレ等の希少植物を確認することができ、貴重な自然環境及び生態系が育まれています。

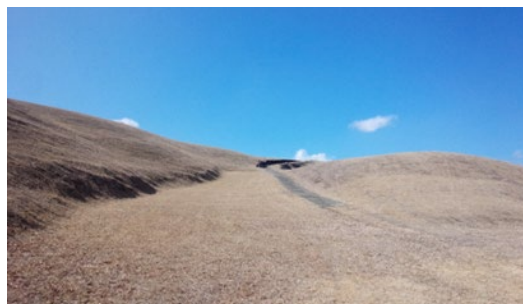
山麓の山吹水源から流れる産山川と池山(いけやま)水源から流れる山鹿川(やまががわ)が小さな谷を作りながら南東方向に流れますが、その2つの谷あいを中心に産山村が広がり、2つの川は大野川となって別府湾に注ぎます。

山吹水源の下流にも傾斜地が多いため、江戸時代に棚田が開かれ、水路及び石橋群が築造されました。扇棚田は、山吹水源から南方に約1.3km導水した標高820mの位置に開墾された約3haの棚田であり、現在も16枚の水田が維持されています。

昭和40年代には阿蘇の広大な草地を対象とした大規模草地改良事業と広域農業開発事業により、草地酪農及び肉用牛の低コスト生産のための飼料基盤整備が行われます。

現在、阿蘇の草地で放牧されるあか牛は役牛として育成されてきたものを品種改良した種であり、その生産は産山村の代表的な産業となっています。

産山村の農村景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要です。



草原



山吹水源



田植え時の扇棚田

# 阿蘇の文化的景観 根子岳南麓の草原景観

No.43-08

所在地：熊本県高森町 選定年月日：平成29年10月13日 面積：93.6ha 選定基準：一(二)

## (1) 概要

高森町は、中央火口丘の南東に位置し、阿蘇五岳(あそごがく)のうち山頂の凹凸が際立つ根子岳がよく見えるため町の象徴となっています。

南郷谷では、白川を中心として、両岸の河岸段丘を棚田及び段々畑、その南北を居住地として、白川の北側集落は中央火口丘、南側集落はカルデラ壁を草地として利用しています。

中央火口丘では緩斜面に広めの草地及び南郷檜(なんごうひ)の林地が広がる一方、外輪山では急斜面が多いため小規模な草地が多くあります。

南郷檜は、昭和30年頃に高森町にて育成方法が確認されたヒノキの優良品種です。江戸期に藩の御用木として植えられ、同様な方法で育てられたヒノキのある神社には、巨木となっているものが認められます。

高森・色見(しきみ)地区は、江戸時代には熊本藩の行政単位であった高森手永(てなが)の中心地として栄え、現在も熊本市街地から高千穂地方へ通じる交通の要所です。現在、国鉄廃線後は第三セクター南阿蘇鉄道の終点となっており、駅周辺では南郷谷の豊富な湧水を利用した酒蔵等がある商店街が広がっています。

根子岳南麓の草原景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要です。



草原



野焼き

所在地：熊本県南阿蘇村 選定年月日：平成29年10月13日 面積：1,995.8ha 選定基準：二(一)(二)(三)

## (1) 概要

南阿蘇村は、南郷谷の西4分の3を占め、カルデラ床を中心に広がります。外輪壁斜面は内側に向かって急峻な地形をなし山頂付近はナラ、カシ、ケヤキ、ヤマザクラ等の天然林となっています。

南郷谷では、白川水源や塩井社(しおいしゃ)水源等の数多くの湧水がみられる一方、火山灰等の堆積層が厚く乏水性の土壤が広がっています。よって、白川を中心として、兩岸の河岸段丘を棚田及び段々畑、その南北を居住地として、白川の北側集落は中央火口丘、南側集落はカルデラ壁を草地として利用しています。

江戸時代には、熊本藩から南郷中用水方定役(なんごうちゅうようすいほうじょうやく)に任ぜられた片山嘉左衛門は、湧水や白川の豊富な水を利用するために、南郷谷の久木野地区に大小の井手(いで) (水路)を開削し、その半生を水利事業にささげました。その後も、片山家が四代にわたり南郷の水利事業にかかわって計6本の疏水群が開削されており、近代以降も、ほ場整備や用水路整備により畑作から水田への転換が進められた地域です。

南阿蘇村西側(旧長陽村付近)では、かつて熊本市街地から阿蘇山上への入口として「阿蘇参り」の参拝者が湯治をかねて一週間ほど、自炊・宿泊を行っていた時期があり、当地には地獄温泉、垂玉(たるたま)温泉と呼ばれる著名な温泉地が広がります。

阿蘇山南西部の草原及び森林景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要です。



草原



草原とあか牛

所在地：熊本県西原村 選定年月日：平成29年10月13日 面積：19.1ha 選定基準：一(二)

## (1) 概要

西原村は、西外輪山の稜線西側及び立野火口瀬の南側に広がります。外輪山の稜線上には俵山（標高1,095m）、その西には火山活動により形成された大峰火砕丘（おおみねかさいぎゅう）及び高遊原（たかゆうばる）台地があり、鳥子（とりこ）川、木山（きやま）川等の小河川が西流します。カルデラ内よりも温暖ですが、「まつぼり風」と呼ぶ冷たい東風が俵山周辺から村域に吹き降ろすため、耕作には厳しい条件にあります。

阿蘇の他地域と同様、俵山を含め標高の高い外輪山の斜面は主に草地として利用されてきたほか、台地には居住地と耕作地が広がります。

高遊原台地は、水はけが良く畑作が発達した歴史を持ちますが、村からは中世の阿蘇神社改築時に合掌材や磨き柱等の良質な木材が提供された記録が残るほか、江戸時代には熊本藩の惣庄屋であった矢野甚兵衛によって、大切畑（おおぎりはた）ため池・堤の造成、水田開発等が行われます。

大切畑ため池は、昭和期に高さ23mのアースダムとして改修され、水田・畑地、防火用のため池・ダムとして、重要な役割を継続的に果たしてきました。平成28年（2016）の熊本地震では決壊の恐れがあるため、周辺住民に避難勧告が出され、布田川断層が直近を通っていることが確認されましたが、地域の歴史風土及び生活の象徴として、早急な復旧が計画されています。

阿蘇外輪山西部の草原景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要です。



草原



野焼き

所在地：大分県日田市  
面積：238.8 ha

選定年月日：平成20年3月28日、平成22年2月22日追加  
選定基準：二(一)(三)(五)(六)

## (1) 概要

日田市の最北端、大分県と福岡県との県境に位置する小鹿田皿山(さらやま)・池ノ鶴(いけのつる)地区は、北に英彦山(ひこさん)を控え、耶馬日田英彦山(やばひたひこさん) 国定公園の南西部を占める地域です。日田市北部を南流する小野川の源流の一つである大浦川及び五色谷(ごしきだに)川が形成した狭隘な谷地において両地区は形成され、水・土・木といった地域資源を巧みに利用した生活・生業が営まれています。

皿山地区では、当地で採取される陶土を利用した小鹿田焼の生産が行われます。「唐臼(からうす)」と呼ばれる陶土を粉碎する施設は河川の水力及びアカマツなどの木材を活用したものであり、窯焼きの燃料には周辺で産出される杉材が用いられます。

池ノ鶴地区では、急峻な斜面地に当地に分布するプロピライト(変朽安山岩)を利用した石積みの棚田が形成され、「除け」と呼ばれる独特の水利システムによって営農が継続されているほか、シイタケ生産や杉材を活用した薪炭材生産が行われています。

「小鹿田焼の里」は、英彦山系を源とする大浦川及び五色谷川によって形成された狭隘な谷間で営まれる、水・土・木等の資源を活かした窯業や農業といった生業が、当地における生活の在り方を示す重要な文化的景観です。



皿山地区全景



棚田と人工林



唐臼



炭焼き小屋・土蔵・ナバ(シイタケ)小屋



た し ぶ の し ょ う お さ き

# 田染荘小崎の農村景観

No.44-02

所在地：大分県豊後高田市  
面積：612.8 ha

選定年月日：平成22年8月5日、平成28年10月3日追加  
選定基準：二(一)(一)(三)(五)(八))

## (1) 概要

大分県の国東(くにさき)半島の西部に位置し、中世に遡る宇佐(うさ)八幡宮の荘園に起源を持つ文化的景観です。

古代には、半島の中心に位置する両子山(ふたごさん)から四方に延びる谷筋に沿って、六郷(ろくごう)と呼ばれる6つの郷村が形成され、そのうち半島の西側に当たる田染郷には11世紀前半に田染荘の村落及び農地が開発されます。その後、田染荘は宇佐八幡宮の「本御荘十八箇所(ほんみしょうじゅうはちかしよ)」と呼ばれる荘園のひとつとして重視され、田染氏を名乗る神官の子孫が代々支配するようになりました。

田染荘を構成する村落・農地のうち、小崎地区は小崎川中流域左岸の台地上に当たり、史料・絵図に残る村落名・荘官屋敷名と現地に遺存する地名・地割・水路等との照合により、14世紀前半から15世紀における耕地・村落の基本形態が現在の土地利用形態にほぼ継承されていることが知られます。現在、水田オーナー制度の下に、住民による文化的景観の保存活用事業が進みつつあり、農地としての土地利用形態の維持にも期待が持てます。

中世の荘園遺跡に起源を持ち、近世から近代にかけて緩やかに進化を遂げた国東地方の農耕・居住の基盤的な土地利用形態を示す文化的景観です。



小崎地区の水田と集落



六郷山信仰にも関わる岩峯(岩屋)



扇状地礫による畦の擁壁



フロノモトイゼによる独特の水利

所在地：大分県別府市 選定年月日：平成24年9月19日 面積：45.7 ha 選定基準：二(一)((五)(六))

## (1) 概要

別府市では、西部の火山帯から東部の別府湾に向けて広がる火山麓扇状地に、豊富な温泉資源を活用した生活・生業のあり方を示す文化的景観が展開します。高温の沸騰泉はそのまま利用することができず、気液分離装置によって温泉水と温泉蒸気とに分けられ、温泉水は配管を通過して集落へ、温泉蒸気は「湯けむり」として空中に高く放出されます。

別府古来の自然湧出泉による温泉地は「別府八湯(はつとう)」と総称され、近世後期までは農閑期を中心に周辺の地域から湯治客を集めました。近代になると、別府港の築港、鉄道・道路の整備により観光客が増加し、別府は一大観光都市へと発展しました。

中でも鉄輪(かんなわ)温泉・明礬(みょうばん)温泉では、近世の旅籠・木賃宿に起源を持つ宿泊業が現在も旅館・貸間として継続しており、住民が組合制の下に管理・運営している共同浴場等とともに、地域生活における顕著な温泉水の利用が見られます。また、近世の史料に記録される地獄釜(じごくがま)の蒸し料理は現在でも行われているほか、明礬温泉では、石敷きの床に青粘土を敷き詰めた藁葺き小屋で湯の花が製造され、入浴剤として販売されるなど、温泉蒸気の利用も特徴的です。

このように、別府の湯けむり・温泉地景観は、扇状地の随所から立ち上る湯けむりの下で営まれる、温泉資源の多面的な利用のあり方を示す文化的景観です。



鉄輪地区全景



別府石の石積みが発達する明礬地区



貸間旅館が並ぶ鉄輪地区



湯の花製造小屋



所在地：大分県姫島村

選定年月日：令和3年3月26日

面積：13462.3ha

選定基準：一(八)

## (1) 概要

大分県北端、姫島村の村域である姫島全域とその周辺海域から成る文化的景観です。瀬戸内海の西端部かつ九州を縦断する火山フロント上に浮かび、その位置は周防灘(すおうなだ)と伊予灘(いよなだ)の境にもあたります。そのため、噴火時の形状を留める火山群を広い砂州が繋ぐ、瀬戸内海では特異な姿を持ちます。この島の容姿が、砂州上の松と共に、海からの目標物であり続けている点に特徴があり、自然環境に大きな負荷をかけることなく漁業や塩業、農業を営んできたことを伝えています。

島内では、二つの村社が瀬戸内海や国東(くにさき)半島との歴史的な繋がりを想起させます。その周囲に形成された集落はいずれも、近海を中心に季節や潮汐に合った漁を通年で営み、漁港周りに漁具倉庫、恵美須社(えびすしゃ)、盆坪(ぼんつぼ)等の共通の設えを見せます。また、塩業や農業の歴史、生活慣習、伝承等に関わる建造物や自然物等が残ります。

このような要素が地形と共につくる景観は、島と海の資源を目一杯生かしながら複数の生業を営んできた海村の生活や文化を表わし、また、漁業期節に代表される生物資源管理の約束事を、島全体で守り、一島一村として自立的に過ごしてきた歴史を伝えるものであり、独特です。



姫島全景



西浦の恵美須社

主屋や附属屋で囲む中庭を作業場とする  
伝統的な敷地配置島内全集落を踊り廻る「姫島の盆踊」と  
そのための盆坪と呼ばれる広場

所在地：大分県豊後大野市 選定年月日：令和5年3月20日 面積：1416.7ha 選定基準：一(五)

## (1) 概要

豊後大野市の西部に位置する緒方盆地は、大分県南西部に広がる阿蘇火山由来の溶結凝灰岩が覆う丘陵地帯に位置します。盆地中央を蛇行する緒方川の侵食により形成された河岸段丘は、丘陵地帯にあって稀有なまとまった平地ですが、他所と同様に川面と大きな高低差があり、灌漑用水を得る努力が行われています。

緒方盆地では、古くは緒方川支流流域で湧水による迫田(きこた)が開かれ、古代には宇佐(うき)神宮の荘園とされ、平安末期には荘司の緒方氏により低位段丘を潤す水路が開削されたとされます。近世には岡藩により中位段丘を潤す水路が整備され、藩屈指の稲作地帯となりました。近代には、丘陵上に長距離水路が整備され、高位段丘と丘陵部に棚田が開かれました。

耕作面積の確保のために、岡藩が水路より高所に集落を移転させる等して形成された川、水田、水路、集落、山林が連なる土地利用が維持されています。また、水路網や石橋、磨崖仏(まがいぶつ)や石風呂(いしぶろ)等、人々が時代毎の技術を用いて溶結凝灰岩を開発に生かし、文化や信仰を育んできたことを伝える要素が至る所に残されます。

当該文化的景観は、大分県南西部に広がる丘陵地帯において、水路開削により稲作地帯として発展を遂げてきた農村の変遷を伝え、貴重です。



近世までに開かれた水田と近世の水路沿いの集落



近代に開発された棚田



水路沿いの石積みを持つ敷地と石造物



段丘崖に掘られた石風呂

## (1) 概要

宮崎県日南市西部の山間地に位置する酒谷地区は、年間降水量が3,000mmを超える多雨地帯であり、飼肥杉(おびすぎ)の豊かな林相が広く展開しています。

集落の起源は未詳ですが、近世には郷土と呼ばれる足軽組軍団が畑地とともに山中に分散して居住していました。近代になると、人口の急激な増加に伴う食糧増産の必要性から耕地整理組合が組織され、酒谷の坂元集落では昭和3年(1928)から同8年にかけて、従来の茅場(かやば)・秣場(まぐさば)に棚田が開かれました。

棚田は、平均勾配1/7の斜面地に、高さ2~3mの石積みで区画された5畝ないし3畝の長方形の水田が27段にわたり整然と展開します。棚田への導水は約1.6km離れた2本の谷筋から長大な水路を引いて行われており、棚田内では階段状に設えられた石積みの用排水路が耕地を貫いています。

集落上部の国有林では早い時期から、集落近傍の民有林は昭和40年代に、草地・畑地・水田から転用され飼肥杉の林地とされ、良質の船材として油津等に移出されました。

酒谷の坂元棚田及び農山村景観は、昭和初期の耕地整理事業により完成した石積みや用排水路を伴う長方形区画の棚田及び良質の船材として栽培された飼肥杉林等で営まれる生業と、畑地及び果樹林等を伴う居住地における生活とによって形成された農山村景観です。



坂元棚田と飼肥杉林



直線的な石積み水路



棚田オーナーによるハザ架け



飼肥杉林

所在地：沖縄県北大東村

選定年月日：平成30年10月15日

面積：162.4ha

選定基準：二(一)(五)(六)(八)

## (1) 概要

北大東島は沖縄本島東方約360kmに位置する隆起珊瑚礁を起源とする地形を持つ南洋の離島であり、明治期に入って開拓が始まった歴史を持ちます。

特に、化学肥料の原料となる燐を多く含むグアノ（鳥糞石）が広く堆積していたことから、大正時代から戦後直後にかけて燐鉱石採掘が盛んに行われました。現在も島の北西部に位置する西港周辺では、採掘場、トラック軌道、燐鉱石貯蔵庫、船揚げ場等の燐鉱石採掘に関連する一連の生産施設が国内唯一残り、当時の社宅及び福利厚生施設等の生活関連施設が住宅群や民宿として継続的に利用されています。これらの施設では、珊瑚が風化して生成されたドロマイトの白い切石が多用されており、独特の景観を呈しています。

現在の北大東島の主産業はサトウキビ生産ですが、技術発展とともに近海漁業も盛んになりつつあり、西港周辺ではサトウキビ畑・ため池が広がる一方、往時の施設を利用した魚市場及び水産加工施設が点在します。

日本列島南方の特殊な風土によって形成された離島において、大正時代から戦後直後にかけて燐鉱採掘が行われていたこと及びその後の産業変遷を知る上で重要な景観地です。



遠景



社員倶楽部遺構（式六荘）



トラック軌道跡



ドロマイト石垣群



# な き じん そん いま どもり や しき りん 今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観

No.47-02

所在地：沖縄県今帰仁村 選定年月日：令和元年10月16日 面積：683.3ha 選定基準：一(八)

## (1) 概要

沖縄島(じま)北西部から東シナ海に突き出す本部(もとぶ)半島の北側中央部に位置し、イノー(サンゴ礁の浅瀬)、海際の現集落、農地、段丘上の今帰仁城(くすく)跡及び旧集落跡(史跡、世界遺産)、山林から形成されています。

近世の集落移動に際し、河川や湧水が流れ込む広い低地が近く、海産物が豊富なイノーに面し、地下水が得られる微高地が適地とされたこと、また、北風や台風の影響を避ける工夫が不可欠であったことを全体として伝える景観であり、中でも、風から屋敷を抱護するフクギ屋敷林が、浜抱護や村抱護と共に緑豊かな住環境をつくり、際立った特徴です。

低地に拡大された農地が隔てる旧集落跡と現集落は、集落立地の考え方が、城との関係性から生活や農業の利便性へと重点を移したことを示します。一方で、沖縄固有の自然崇拜に基づく祭祀や芸能は、集落移転後も継承され、クバの御嶽や城跡を始め、山から浜までの各拝所等で現在も行われています。

こうした特徴や特性は、亜熱帯気候に属する島嶼(とうしょ)群である沖縄県の集落の成り立ちを知る上で示唆に富み、かつ、地域的な慣習や信仰と景観との関りを良好に伝えるものであり、我が国の生活及び生業の理解に欠くことのできない文化的景観として貴重です。



浅瀬に突き出す微高地に集落が立地



丘陵の今帰仁城跡。近傍に旧集落跡も遺存



フクギの屋敷林



拝所となる浜